
眠り姫の起床時刻

三条司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

眠り姫の起床時刻

【Zマーク】

Z9908E

【作者名】

三条司

【あらすじ】

【2/24更新しました】勇者は元・農民で重度のシスコン。パーティーメンバーは、セクシー魔導士とロリー賢者。助けに行くのは、曰くありげな公主様。敵は泣き虫魔女。「こんなつもりじゃなかった」旅、はじまりはじめです。

protoype・眠れるお城のひやひや話（前書き）

河童で出会った皆さん、お久しぶりです。
誰だお前、と言つ方々、はじめまして。三條同と申します。以後、
お見知りおきを。

連載ものとしては、一作目になります。
べつたべたのファンタジーが書きたくつて始めました。
どうか、楽しんでいただけますように。

すすり泣く声が聞こえてくる。

大理石で出来た廊下はぴかぴかに磨き上げられていて、ところどころに設置されたアンティークの家具や、これまた年代物の甲冑などを映し返していた。一点の曇りもない窓には深い赤のビロードのカーテンが、カーテンを束ねるのは上品なベージュ色のカーテンタッセル。

窓から見える景色は、手入れの行き届いた中庭。中庭の真ん中を通る道には真っ白な砂利が敷き詰められていて、それは真っ直ぐに重厚だが気品のある高い門扉へと続いている。小道の中程には、それぞれ左右にひとつずつの噴水。さらさらと流れる水は、時折吹く風によつて霧のように霧散していった。

ひとを圧巻させるには充分な大きさの建物は、城と呼ばれるのがふさわしい。その威圧的な名称とは対照的に、その雰囲気はあくまでも友好的で開放的だ。

だが、今その建物は、それを満たす決定的な何かに欠けていた。

人の気配。そして、声。

あまりにも静かな城からは、ひとはおろか、獣の気配すらしない。

モンスターに襲われたにしては綺麗な内観は、それに清浄過ぎる空気を相まって、一種神殿のような雰囲気に包まれていた。

ただ、ひとつを除いて。

建物の最上階。客人などは近付かないでありうプライベートな部屋から、その泣き声は聞こえていた。

部屋には、ふかふかと毛足の長い絨毯で覆われた床。広々とした部屋の中央に鎮座した、天蓋付きのベッド。サイドテーブルに乗つたのは、纖細なガラス細工を施されたグラス。中庭を展望出来るバルコニーに続く窓からは、柔らかい光が差し込む。

ベッドの上には、一人の少女が眠りに就いていた。閉じた瞼には、長い睫毛が縁取られていて、うつすらと薔薇色に染まった頬は上等のビスクドールを彷彿させる。華奢な体躯を包むのは、豪奢なドレス。たくさんのフリルがついた袖から伸びた手首は、それだけで芸術品のような指へとなめらかな曲線を描く。

その指を、つこと掴む手が現れた。

指を強く握つても、ベッドの少女は何の反応も返さない。それを見て取ると、すり泣く声はますます激しく、そして哀しみの色を強くした。

声は若いというよりも幼く、指を離したその人影は小さい。ベッドの少女ほど豪華ではないが、きちんとしたドレスを身にまとつたのは、同じく少女。顔を両手で覆つてすり泣く彼女の顔は誰にも見えないが、その長い銀髪と頭から生えたそれは否が応にも他

の田を引く。

その頭部からは、鹿のものによく似た角が一本、生えていた。

「…んなつもりじや、なかつたのに…」

さめざめと泣く少女の、手に覆われてぐぐもつた咳きは、人の気配が消えてしまった城においては、誰の聞き手も望めなかつた。

ACT I ; Scene 1 : 拝啓、妹君

ノルマントン大陸において、絶対的な力を持つオード帝国。その東には南北に伸びる魔法国家ヴェランデ。北方には魔法騎士団で有名な、小さな独立国家を築くロクサンヌ公国。互いの力の源は違えど、軍事力に秀でたオードは、魔力に秀でたヴェランデ、ロクサンヌ両国と友好的な関係を結んできた。

オード帝国東部、ヴェランデとの国境にほど近いディグオス村。

その称号にふさわしく、こじんまりとした大きさのその集落は、しかし、争いのない平和な農村だった。そこでは、都会では古風と揶揄されるような慣習も未だ残つており、人々は毎日の喰みを一所懸命にこなしている。

「アメリカ……」

そう切なげに呟くのは、グレン・トライブ。一一のところ、テレンシア公国領、ダラム市において街の人々の注目を浴び続ける青年である。

年の頃は十八歳といったところか。秋の収穫で農民なら顔をほころばせそうな麦穂のようなブロンドは、毛先が少し褪せてぴょんぴょんと立っている。うつそりと細められる瞳は、芳ばしそうなヘーゼル色。体躯はかなり立派な方で、だからこそ、彼が背中を丸めて、その体と比較すると小さく見えるテーブルに頬杖をつく姿は少しばかり滑稽だ。

「アメリカ……、兄ちゃん、本当にこれで良かつたのかな……」

手にした陶器のグラスの中身はアルコールではなくて、ただの山羊のミルク。酔っているわけではないらしい。

「兄ちゃんは、心配だ。アメリカは元気でやつてるのか。じいちゃんとふたりで、おれがいなくて、誰が畠の世話をしている？アメリカ、間違つても、村の若い衆には頼むんじゃねーぞ？何てつたつてアメリカくらいかわいいこだからな。みんな、アメリカを嫁にしようと企んでいるに決まってる。そうだ。そういう輩からアメリカを守るのも、兄ちゃんの役目だったよな。なのに……。はあ……。兄ちゃんは、何をやつてるんだろ？」「…………」

昼間つから宿の一階にある食堂で、酒もなしに女もなしに独り言をぶつぶつと呟くグレンの姿は、食堂連中から奇異の目に晒された。だが、そんなことに気付く素振りも見せない純朴そうな青年は、日が昇つてから何度もかといふため息をつく。

そう。すべては、あの口から始まつたのだった。

グレン青年は焦点の定まりきらない瞳を、腰にぶら下げた帯剣に向けた。

この、名剣「金穂の炎」^{フィアツマ・パグリア}が、そもそも始まりだったのかもしない。

ディグオス村において、男女の役割は明白だった。即ち、男は

畑仕事に精を出し、収穫された作物を周辺の街で売り歩く。女は家を守り、子どもを育てる。村内の人間関係は、大きくなつた家族とも言つべき親密さ。男女は、それなりの年齢に到達すると、村長と村役員と呼ばれる数人の老人たちの取り決めによつて、結婚をし、場合によつては家を建て新たな畑を作り、子孫を作る。

ただ、そういうた環境にあつて、グレンのものは多少変わつていなかもしれない。まず、グレンは母親の顔を知らない。グレンを産んですぐに他界した。母なし子と苛められることもあつたグレン少年を心配した父親ハリーは、グレンが六つのときに、グレンの祖母の死もあつて隣村の女性と再婚。その一年後、彼女の腹が大きくなつたときに、父親に言われた言葉を、グレンは今でも鮮明に覚えている。

「グレン。もつすぐ、グレンはお兄ちゃんになるんだ。そしたら、お前は命がけでそのこを守つてやんなきやなんねえ。お兄ちゃんつてのは、そういうもんだ」

祖父、父親と共に、台所のあるテープルを囲んで待つこと数時間。新しい母親から生まれた新しい生命は、グレンの心を喜びでいっぱいにした。

自分と同じブロンドの髪に、自分のものよりもずっときれいなブルーの瞳。アメリカと名付けられたそのいたいけな存在は、生まれた瞬間から、グレン少年の生き甲斐となつた。それは、アメリカが三歳のときに、両親が事故死したことによつて、更に思いを強める」ととなる。

「お兄ちゃん。グレンお兄ちゃん」

そう呼ばれるたびに、こころが踊つた。笑顔を向けられるたびに、どんな困難なことも乗り越えられると感じた。その背丈が年々伸びていくのを、奇跡のように感謝した。自分が愛する存在が自分を必要としてくれていることに。消えていつてしまわないことに。

だから、アメリカの行くところには、どこへだつてついていった。エミリーとの花摘みにだつて、アンナのかくれんぼにだつて。キャロルとのお泊まり会について行こうとしたら、遠慮して欲しいと言われたので、仕方なくこつそり後をつけて、アメリカの姿が確認出来る家のすぐそばでその日は野宿した。秋も深まる頃だつたから、ちょっとばかし寒い気もしたけれど、それもすべてアメリカのためだと思えば我慢出来た。村の小さな塾で読み書きだけは習いたいとアメリカが言ったとき、グレンは焦つた。塾なんかに行つたら、アメリカの可愛さでもつてして、今までお近づきになれなかつた村内のはな垂れ小僧やませた色ガキ共が、こぞつてアメリカの隣の席を奪い合うだろうと予測されたからだ。グレンは、自分もその塾に通うことを決め、クラスの中で一番体格の良い、年齢も上の生徒としてアメリカが暴徒に襲われないように通い続けた。もちろん、その間畑作業をおろそかにするわけにもいかないので、これまでに培つた筋肉を存分に發揮させて、塾が始まるまでの朝と塾が終わつてからの午後で、大人なら丸一日かかる量をやってのけた。

つまり、グレン少年の妹への愛は、明らかに行き過ぎで過保護なのだが、本人にそのような自覚は毛頭なく、尚かつ、村一番の力持ちであるグレンにそのような忠告をする者もおらず。かくしてグレンは自分の過剰な愛が、至極まつとうなものであると認識したまま、これまで生きてきた。

そのアメリカが「勇者」と呼ばれる存在に憧れを抱くようになつたのは、いつのころからなのだろう。

ある日、畑作業を終えて帰ってきたグレンは、頬を上氣させて興奮したいでアメリカが話しかけてきた。

「おかえりなさい、お兄ちゃん。あのね、すつごい話を聞いちやつたの、あたし！」

大きくなつたといつても、まだ十歳の妹である。グレンはたちまち相好を崩した。

「何だい、僕の可愛いアメリカ

「んもうーその言い方、やめてつてば。あたしはもう、十歳なんですからね」

「そうだったね、兄ちゃんが悪かった。それで、すつごい話つて、何かな？」

首にかけた布で、額の汗を拭き取りつつ、グレンは椅子に腰掛ける。鍋を搔き回していたらしいお玉を持って、アメリカはグレンのそばに立つと、皿をさらさりとさせた。

「あのねー、あるんだって、勇者さまの剣ー！」

「勇者さまの、剣？」

「そうー、あのね、えっと、この村から、ちょっと外れたところらしいんだけど」

「まさかアメリカ、おれが畑に出でているときー、村から出たんじやないだろうね？いつも言つてるだろ？外には、可愛い可愛いアメリカを狙う、変態がたくさんいるからって」

自分がまさか、俗にシスコンと呼ばれる変態カーティニーに属するとは、夢にも思わないグレン青年である。

兄の絡みづら言動にも慣れっこのアメリカは、何事もなかつたのかのように会話を軌道に戻した。

「そうじゃなくて。あのね、ロジャーおじさん聞いたの。山羊のミルクをもらいに行つたときには。ロジャーおじさん、昨日、巡回から帰ってきたところなんだって。それで、立ち寄った街でね、勇者さまの剣を見たんだって！ すげーと思わない？」

「そうだねえ。アメリカは、勇者さまが大好きだもんなあ。よく、そういう本も読んでるし」

「お兄ちゃんたら。あたしが好きなのは、実在する勇者さまよ。本を読むのは、この村には勇者さまにふさわしいひとがないからだわ」

なかなか、シビアでシニカルな意見なのだが、グレンは違つた解釈をしたらしい。そしてそれは、アメリカの思つた通りの反応だつた。

「そりゃ……。兄ちゃんがアメリカの勇者になるには、何か足りないんだな」

「そう！ そりゃ……。お兄ちゃんは、絶対に資質があるの！ だつて、背も高いし、がつしりしてるし、力持ちだし、強いし、優しいし、ブロンズだし、剣とか鎧とか冒険が似合いそうな顔をしてるし。だからね、お兄ちゃん。勇者さまの剣を見に行きましょうよ」

「ええ？」

「ロジャーおじさんが言つこは、勇者さまの剣は、その持ち主を待つてゐるんですつて。何でも、誰にも抜けない剣らしいの。

でも、きっと、お兄ちゃんなら抜けるわ。 だって、お兄ちゃんは、あたしのお兄ちゃんなんだもの！ ね？」

熱っぽく語りて、最後には首を可憐に傾げる」とも忘れない。自分の魅力を最大限に利用したアメリカのスピーチは、ただでさえバイアスのかかっているグレンの目には、どこぞの女神様のように映つた。

ぐつとガツッポーズを決めて、グレンはアメリカを見つめる。
何て可愛いんだ、妹よ、などと思ひながら。

「そうだな、アメリカ。 それを抜ければ、兄ちゃんは、正真正銘の勇者さまだもんな。 よし、行こう！ 兄ちゃんがすごいってことを、アメリカに見せてやるがい！」
「さつすが、お兄ちゃん！」

手をぱちぱちと叩いて、アメリカが喜ぶと、グレンは田原をだらしなく下がらせて破顔した。

「ところで、それはどこなんだ？」
「ええとね、ペサ一口つて街ですって」
「どこだ、それ」
「わあ

兄妹は、めいめいに首を傾げて、聞いたことのない地名を口にした。 ペサ一口？ ペサ一口。 ペサ一口かあ。 ペサ一口ねえ。

「わからん」
「あたしも」
「どうしようか」

十歳の少女に丸投げしてしまつと、グレンはアメリカの後方でぐつぐつと音を立ててゐる鍋の方を気にかける。 そういうばあ、おながすいてきたな。

「おじいちゃんに、聞いてくるー。」

手にしていたお玉を兄に渡して、アメリカは機敏にて、一踏で休んでいるはずの祖父のもとへと駆けていった。

ACT I ; Scene 1 : 拝啓、妹君（後書き）

「金穂の炎」は正式名称を La fiamma della pagaia と言います。

この名称は、国によって変化するのですが、そのへんはストーリーが先に進んでから説明することにいたします。

Scene 2 : 運命ではないかもしない出来事

「ふわあ～……」

欠伸とも感嘆とも取れる擬音語を紡いで、グレンは大きく空を仰ぎ見る。肩にショットした布のサックが、彼がくるりと首を回すたびに通行人に当たっているのだが、本人は気付かないらしい。ヴェランデでは、ブロンドは珍しい。それだけでグレンとアメリカの兄妹は目立っていたのだが、そこへもってきてグレンのお上りさん丸出しの態度は、国境にある街ピアチョンツアの人々の失笑を買つていた。

「グレンお兄ちゃんたら。そんなにきょろきょろしていたら、勇者さまらしくないわ」

「あ、じめん」

もうすっかり、アメリカは兄を勇者にするつもりでいるので、自然と口調がしつけ役のそれになってしまつ。可愛く口をすぼめる妹を見て、グレンは従順に謝つた。勇者がペコペコするもののかは、この際、議論するべきではないのかもしれない。

「でも、びっくりしたわ。おじいちゃんが、勇者やまの剣を知つてたなんて」

「これでも昔は、色んなところを渡り歩いたもんよの」

「す、じーーー！　じゃあ、ここにも来たことがあるの？」

「もちろんじゅ。世界はの、わしの庭みたいなもんじゅから」

「す、じーーー、す、じーーー！」

明らかに誇張された祖父、ベンの言い分に、アメリカは狂喜乱舞する。ただし、これは不自然なことではなかつた。ディグオス村において、外の世界を知るということは、すなわち男として優秀だとアピールすることと同じになるからだ。基本的に、女性は滅多な事でもない限り、外出などせず、精々が隣村まで。

「あれ？ 何だ、あのひとだかり」

のんびりとグレンが呟く。当初の目的をまったく忘れてしまっているグレンは、村の青年たちに頼んだ鶏の世話や畠の世話を考えていた。

「え？ なに？ なに？ 見えないわ」

ヴェランデ人は、オード人よりも基本身長が低い。オードでも長身の部類に入るグレンは、それこそ頭ふたつ分ほど飛び抜けていて、そのせいで遠くにある人ばかりがよく見えた。加えて、田舎暮らしで培つた視力は、ほぼ野生のそれだ。反してアメリカは、通行人に埋もれてしまいそうな身長なため、兄の見つけたものを目止めることができなかつた。

両手をこちらに伸ばしてきた妹を軽々と抱きかかえ、グレンは彼女を肩の上にちょこんと乗つけた。

「あ、ほんと！ すごい人だわ。きっと、あそこにあるのよー。」「何が？」

「もうー、お兄ちゃんたら、忘れっぽいんだから。勇者さまの剣でしょ」

「勇者さまの、剣？」

「誰も抜けない、勇者さまの剣！ それを抜いて、お兄ちゃんが

勇者さまになるんでしょ」

「…………」

手乗り文鳥よろしくぴいぴいと喋るアメリカを肩に、グレンはしばしの間思考する。勇者さまの剣。そういえば、そんな話があった気がする。

「お兄ちゃん？」

「ん？ あ、ああ。思い出した、思い出した。 そうだった、そうだった。じゃあ早く、抜きに行こい！」

「うん！」

鳩並の記憶力を見せつけて、グレンは妹と祖父と連れ立つて、人ばかりの方向へと向かっていった。

「さあさ、寄つてらっしゃい、見てらっしゃい。これが巷を賑わせている、名剣、金穂の炎だ！」こいつは、大気中に存在する火の女神さんのキスを賜つたってえ、すんげえ代物だ。こいつを使いこなせば、勇者になるのも夢じゃねえ。おっと、質屋に入れようなんて考えちゃあいけねえぜ？ 何せ火の女神は、嫉妬深い話だからな。さあさ、こいつを抜こうって気概のある奴あ、いねえのかい！」

石で出来た四角い台の上に、大振りな剣が一本、刺さっている。刀身の半分くらいまでが台の中に埋もれていて長さは計りかねるが、柄の部分には大きな赤い石がはめ込まれている。宝石などを見たことがなかったグレンには、それはまさに燃えかかる炎のよう

に見えた。 台からは数段の階段があつて、剣が収まっている台よりも更に大きな台が設けられていた。 それを囲むようにして人だからりが出来、その中心では男が、剣のたたき売りでもするかのように朗々と口上を並べている。

しかし、ヴェランデ語を解せぬグレンたちには、男の言葉はちんぶんかんぶんだった。

「あれ、何て言つてるのかな」

「わあ

兄妹で首を傾げたそのとき、背後から声をかけられた。

「あら、オードのひと？」

「珍しいねー」

振り返れば、ふたりの少女の姿。

ひとりは、すらりと背が高い。 女性としてはかなりの高身長だ。 青に近い紺色の髪はまっすぐに腰のあたりまで伸びて、時折吹く風にゆらめく。 切れ長の瞳はヴェランデ人に特有の、濃い茶色。 肌もこころなしか、オード人よりもこんがりと日焼けしている。 肩を出したデザインの上着に、ふとももの付け根まで入ったスリット入りのスカートを穿いている。 全体的にアダルトな雰囲気がつきまとづ。

もうひとりは、対照的に小さな少女。 アメリアよりも少し高いくらいか。 ゆるくウエーブのかかった栗色の髪をツーテールに結わえ、薄いブルーの瞳には好奇の色が光る。 フリルがふんだんにあしらわれたドレスは丈が短く、膝の上までくる白いソックスの付

け根にもフリル。そして特筆すべきは、その上半身。全体的に華奢な体つきにきゅっとくびれたウエストからは想像も出来ないほどの豊満なバストが目を引く。

男性の多くは、このスレンダー・セクシー美人が、ロリータ巨乳少女に心奪われてもおかしくなかつたが、あいにくと、グレンの脳はアメリカ以外の女性は琴線に触れないようになつていて、それが普通かどうかはまた、別として。

グレンは、ふたりの少女と声を張り上げる男とを見比べて、そして、

「あれ？　このひとたちの言つことは分かるのに、やつぱり、あのおっさんの言つことは聞き取れないや。近耳きんじかな」

「何よ、近耳きんじつて」

セクシーなハスキーボイスで少女が問つと、グレンはいともなげに答えた。

「近視の耳つて意味」

「ないわよ、そんな言葉！」

見た目のロリータ百合を裏切らないロリータボイスで突つ込まれる。

「あんたねえ。オードで話されているのは、オード語。ここはヴァランデだよ？　ヴァランデ語を話すに決まってるじゃないか？」

「そうなのか？　ていうか、オード語なんてあつたんだな。みんな、同じ言葉を話すのかと思ってた」「どこに田舎者よ……。あなた、どこから来たの？」

「ティグオス村」
「どこよ、それ」

げんなりとロニー・タ少女が顔をしかめた。

「あのー。」

グレンの肩から、アメリカがふたりに声をかける。

「初めて。わたし、アメリカ。アメリカ・トライブって言います。こっちは、おじいちゃんのベン・トライブ。そして、お兄ちゃんのグレン・トライブです。」

「あらあら。妹さんは、ちゃんとしつけがなってるみたいねえ」「頭の出来も、お兄さんとは少し違うみたいー。」

くすくす笑いで少女たちは意地悪なことを口にするが、アメリカへの賛辞の部分しか理解出来なかつたグレンは満面の笑みを浮かべる。

「そうだろー？ アメリカは可愛い上に、頭も良い将来有望なんだ。なー、アメリカ」

「ちよつと、お兄ちゃん。そんなことせ、今どつでもいいんだつじば」

「どうでも良くないぞ、アメリカ。アメリカがいかに素晴らしいかっていうのは、真実だからな。みんなに教えておかないと」「あとでしょりよ~」

困り顔のアメリカに、少女たちが助け船を出す。

「じゃあ、こっちはも自己紹介。私は、ユリア。ユリア・モー

スタン」

スレンダー美人がにこりと微笑めば、ロリーータ少女が天真爛漫な笑顔を振りまく。

「あたしは、——ニヤ・ガルダス。——ニヤって呼んでね」

「それで」

ふたりはそこで声を響めると、グレンを覗き込むように距離をつめた。

「グレン、だっけ。——ニヤ、何しに来たの？」

「金穂の炎が、目的？」

「うん」

すんなりとグレンは首を縦に振る。

「おれ、あれを抜いて、勇者さまになるんだ。なー、アメリカ」

グレンのお馬鹿な発言を耳にして、ふたりの少女はにやりと視線を交わして微笑んだ。

Scene 2 : 運命ではないかもしない出会い（後書き）

グレンは、Green Drive、ユリアはJulia Morris tanu、リーナはLina Gardas（aの上に）を付けた方です）。

Scene 3 : Who is GANSAKU?

「あの剣はね」

まるで聞かれてはいけない」とのよひに、一一ニヤが声を落とす。

「最近、この近くの遺跡から見つかったもののな。考古学者のせんせーたちがこぞって、これは名剣だーって叫ぶもんだから、あっちこっちから勇者志願の剣士たちが大陸中から集まつてくるのよ。ただね、見ての通り、剣は台座の中に埋まつたまんまで抜けないのよね」

ほう、と思わせぶりにため息をつくと、絶妙のタイミングでコリアが後を引き継いだ。

「もちろん、塚の部分を調べた学者の言つには、あれが贋作である可能性は低いつて」

「がんさく？ 人？」

「違う！ が・ん・さ・く！ 良くできた偽物つてことー。」

「え？ あれ、偽物なのか？」

「ちつがーう！ 偽物ではない、つまり、本物だつてことー。」

「なんだ。じゃあ、初めから本物だつて言えぱいーのに」

「初めっからわざと言つてるじやない。贋作ではない、つて言つてるんだから」

「がんさく？ 人？」

「違うつてー！」

下手をすると無限のループに陥りそうな予感を嗅ぎ取つて、ユリアは苛立しそうに髪をかき上げ、鼻から息を出した。グレンは

ぽかんとそのヘーゼルの瞳を純朴に開いたまま、すいませんと謝る肩のアメリカを見つめる。

「どうしたんだ、アメリカ？」

「お兄ちゃんは、大人しく話を聞いていてよ。あとであたしが、ちゃんと説明してあげるから」

ハツモ下の妹に、多少呆れた聲音でそう言われても、グレンの極太の神経は何も感じない。素直に破顔すると、アメリカは優しいなあ、などとのたまつた。

「うょつと、こつ、やばくない？」

肩を落としたままのユリアに、ニーニヤが話しかける。幸い、グレンがアメリカに見とれて、アメリカがそれを叱りつけているため、「ひむに注意が向く」とはない。

「うん……ちょっと、かな。まあ、様子見てからうてことで」

「どうかしましたか？」

「あ、ううん！何でもないの！」

両手を左右に振って、ニーニヤが歯を見せて笑う。と、近くを通りかかった中年の男性がそれを見て、だらしなく目尻を下げる。嫌悪の表情も露わに、ニーニヤが男性を睨み付けると、ますます男性は目を二三回のよじて細めた。

「お嬢ちゃん……」

「行かない！ 呼ばない！ しない！－！」

ふらふらと一いつひりに寄ってきた男性が言い終えるより早く、ニー

「ヤが噛み付くやつ」早口でまわしたてる。

「まだ、何も……」

「だからー、あたしは、おっさんとどうにも行かないし、あなたのことをおじさまだの何だのって呼ばないし、おっさんが望んでいるようなことはどれもしないー。あっちに行つてよー。」

「おお、おお、可愛いなあ」

「んわ~~~~~。コリアー」

半泣きの顔をコリアの方に向けると、コリアはするつと男性の前に立ちはだかつた。そして、一咄。

「痛い田に遭いたいのか？　おっさん」

「ひつ」

ドスのきこた声で言われ、男性は田が覚めたみたいに小さく悲鳴を上げて、そのまま後ずさりをする。ニーヤを庇つようつて立つユリアのせいで、男性にはニーヤの姿がまったく見えない。ユリアがもう一度、睨みをきかせると、男性は今度こそ回れ右をしてわざと姿を消した。

「ありがと、コリア」

「——ヤがほつと息をつくと、コリアは口を片方だけ歪めてふん、と笑う。

「あらが、がんせく？」

「お兄ちゃん！　がんせくは、人の名前じゃないでばー！」

去りゆく野性の背中を見てぽつりとグレンが言つて、アメリカは

大仰に天を仰いで叫んだ。そして、再度、目の前の少女たちを見つめて、ぺこりと頭を下げる。

「『めんなさい』。お兄ちゃん、決してひとが悪いわけじゃないんだけど、ちょっと空気が読めないっていうか、脳みそも筋肉になりかけてるっていうか、運動神経のために知性を犠牲にしたつていうか、むしろこれで勇者でもなかつたらそれこそただのお馬鹿さんになり下がつてしまふというか、とにかく、心根が腐っているわけじゃないんです！ 腐るほど、知能指数があるわけじゃないですから。だから、ユリアさん、ニーニャさん。お兄ちゃんが、ただの馬鹿になつてしまふのを阻止するのを手伝つてもらえませんか？あの剣を抜いてしまふのが、一番手つ取り早いんですけど、あれって何かいわくがあるんですか？」

「あんたつて……」

「あなた……」

その後を、ユリアもニーニャも口には出さなかつたが、思いは同じであつた。すなわち、小さいのに、結構辛辣なことを言つね、と。

我に返つたふたりは、アメリカはそんなにお兄ちゃんが大事か、などと涙を流しているグレンをこの際無視することにして、脱線していた話を元に戻す。

「塚に埋め込まれた石はルビーなんだけど、ルビーはルビーでも、ヴェランデでしか取れないルビーなの。そして、それは一様に火の女神の祝福を受けていると言われているわ。それを塚に埋め込むなんてことは、魔法に長けた人間にしか出来ないこと。つまり、あの剣は、火の魔導士が作成した剣」

「そして、魔導士が作った剣は、その瞬間から、鍛冶屋の作った

「う」
剣とは一線を引く。あれはね、アメリカちゃん。剣は剣でも、魔剣と呼ばれる類のものなのよ。だからこそ、あれには名前がある。ヴェランデ語ではフィアツマ・パグリアつていうんだけど、オードだと多分、フレーム・ストローつて呼ばれてるんじゃないかなし

「フレーム・ストロー？」 稲穂の炎？

「そう。もちろん、あれは発見されてから誰も使つていなか
ら、その効用のほどは分からんだけど、文献が残つていてね。
フィアツマ・パグリアは、一太刀で炎の穂をつけるつていわれて
るの」

「魔剣だからね。魔力のない人間が使つても効用はない
なみに、グレンは魔力はあるの？」

話を聞いているのか聞いていないのか。それとも、聞いても理解できないだけなのか、静かにしているグレンに、アメリカが声をかけた。

「おつー、お兄ちやんは、アメリカのためだつたら、かほちやを馬車にすむ」とへりこ、何てことなごやう

「えっと、ないみたいですね。生まれた時に、調べなかつた？」

「そつか。ヴァランテだと、新生児にね、石を持たせるの。その石がどういった変化をするかによって、そのこの資質を調べることができるのよ」

「その慣習なら、オーディにもある」

今まで立つたまま眠っていると思われたベンが、急に口を開いたので、女性陣は大いに驚いた。コリアにいたっては、右手を心臓

に当てて、呼吸を落ち着けている。

「そうなの？　おじいちゃん」

「あるとも。　ただし、石もただではないからのう。　ティグオスで、そんなもんに金をかけられるやつはほとんどおらん。　そもそも村の人間は、魔法の資質など関係のない生活を送っているから、不便でもないわい」

「なるほど……」

恐るべし、ど田舎ーとは口に出せまい、神妙な面持ちでコリアと一一ニヤは頷いてみせた。

「魔法に対抗出来る非魔法っていうと、薬師が作る薬くらいのものなのよね。　それ以外だと、やっぱり魔法防御のかかっている武器や防具に頼るしかないから。　だからこそ、あのファイアツマ・パグリアを手にすることが出来れば、魔法の使えない人間でも、魔導士と戦えるようになるってわけ」

「あの台座には石碑のようなものがくつついていてね。　そこには」

「書いてあるの。我、選ばれし者の手に。　ってね」「すいこ。　じゃあ、本当に、あの剣を抜くことが出来れば、勇者さまになれるのね」

感動に声を震わせて、アメリカが微笑んだ。

「やい、どうする？」

一一ニヤが、グレンを見上げて尋ねる。

「それでもあなたは、あれを抜きに行く？」

にやりと笑つて、ユリアが後方の人だかりを指さした。

「えっと、何の話だっけ？」

グレンが言つと、アメリアはたまらず兄の頭をぽかぽかと殴る。

「いて」

「行きます！ 何があつても、行きます！！」

敏腕マネージャーよろしく、アメリアが声を上げた。

Scene 3 : Who is GANSAKU? (後書き)

金穂の炎は、オード語で The Flame of Golden Strawです。

つまり、オードは英語圏、ヴェランデはイタリア語圏です。
(ちなみに、strawは麦穂という意味で、飲み物を飲むストローの語源です。)

ストローは、エジプトにて不純物の多いビールを飲む際に、稻穂をストローとして使つたのが、その理由だとか。)

Scene 4 : 勇者さま、いりませんか？

こんな筈じゃなかつた。

ただ、アメリカを、妹を喜ばせたかつただけ。

勇者なんて本当はどうでもいい。 魔法なんて、争いなんて、戦いなんて、どうだつていい。

毎日を、同じよつに過ごせればいい。 秋には収穫の出来を心配して、春には種まきをして。 穏やかに、家族と一緒に毎日を、毎月を過ごせれば、それでいいのに。

台座に埋め込まれた剣は、確かにちょっと引っ張ったくらいでは抜けなかつた。 それでも、ほんの少し、腕に力を込めればそれはするすると姿を現した。 ジャガいものつるの方が、余程手強い。

この剣を抜けば、アメリカの笑顔が見られると思った。 だから、抜いた。 たつたそれだけのこと。

なのに、何故か当のアメリカはそばにおらず、グレンが気付けば周りを取り囲んでいたのは、今まで見たこともない人間ばかり。 人だからに飲み込まれて怪我でもしてやしないかと最愛の妹の姿を探せば、祖父と共にこちらを見つめるその愛らしいシルエット。 驚いていながら喜んで、喜んでいながら信じられないといった顔で、アメリカはグレンを見つめていた。

「アメリカ！」

叫んだけれど、その声はがやがやとした歡声に飲み込まれてしまつ。

「おい、あんた！」

剣を手にした腕をぐいと引っ張られてこちらを振り向けば、見るからに戦士ファイターといつたていの男。

「あんた、パーティーメンバーはいるのかい？」
「は？」

まるで縋るよひに触れてくる野の手を煩わしく思いながら聞き返すと、男はそらに詰め寄つてくる。

「だから！ あんた、旅に出るんだろ？ だったら、パーティーメンバーがいた方が何かと便利だろ？ ビッグだい。 おれは、オードではちよつとは名の通つた」

グレンには皆理解の出来ない内容を口走つていた男は、しかし、横から伸びたふたつの腕によつて思い切りよく突き飛ばされてしまう。

「はーいはーいはーい、あんまり近寄らないでくれるー？」

「——ニヤが片手でグレンを後ろ手に庇いながらヴァランテ語で言えば、

「せうせうじ、じこつと喋りたいんなら、並んで並んで！」

とコリアがオード語で声を上げる。

「あんたたちの前に、ここに話すべき人間つてのがいるんだよ」「アメリカちゃんへん？」

甘い声音で「——ヤが呼ぶと、人だから離れて立っていたアメリカがおずおずとこちらに近寄ってくる。自然とそこには道がつくれられ、アメリカは両脇に好奇の目を感じながら兄のもとへと歩み寄った。

「お兄ちゃん……！」

「アメリカ……！」

お兄ちゃん、やつたぞ。この剣を抜けば、お兄ちゃんは勇者をまだろう？ アメリカだけの勇者をまだ。 もう、おつかれ帰れ。

感動的なスピーチになるはずだった。剣をどこかに置いてしまったかつたがそもそもいかず、仕方なく片手だけをアメリカの方に差し出す。

「お兄ちゃん、寂しくなるけど、頑張ってね！」

「ん？」

「ん？ ジやないでしょ！ お兄ちゃんは、勇者さまなのよ？ 勇者さまっていうのは、世界中を旅して、困っているひとを助けに行くのよ？ うわあ、すごい、お兄ちゃんたら、本物の勇者さまになつたのね！ あたしもおじいちゃんも、村の人たちだつて、みんなみんな、お兄ちゃんのことを誇りに思つてゐるからね。 ちょっと寂しくなるけど、大丈夫。 お兄ちゃんは、勇者さまのお仕事を頑張つてね！」

「……ん？」

差し出した手をまつたく無視して、アメリカはにじにじ顔でコリアに近づく。どこか計算された躊躇いの色を見せるとい、口を開いた。

「コリアさん。コリアさんたちって、もしかして、魔導士ですか？」

「私は風の魔導士。一一一やは賢者だよ」

「わあ、すごーーーーーでは、これから、兄をよろしくお願ひします」

ペニリと頭を下げる姿は、それだけで、はんが食べられそうなくらいの可愛さだ。我が妹ながら、こんなに可愛くて将来どうするのだろうと、グレンは不必要的心配をする。

「え、アメリカちゃん、それって」

「お兄ちゃんって、見ての通り、ちょっと抜けてるっていうか、割と鈍感っていうか、理解力が牛並みっていうか、とにかく、あまり渡世術に長けていないので。コリアさんや一一一やはさんたちみたいに、しつかりとした、強い、色々と仕切ってくれそうなひとにお兄ちゃんをお任せしたいんです。そこには、戦士のひとなんかでは、お兄ちゃんは手に負えないと思います。お兄ちゃんを操るには、忍耐力と行動力の両方が必要ですから! もちろん、コリアさんたちにも、勇者さまと一緒に旅をするってことで、色々と特典はついてくると思うので、まったく悪い話でもないと思っていますけど。どうでしょ?」

「えーと」

本当に、あなた、十歳?

一番聞きたかった質問を飲み込んで、コリアはにじにじと微笑んでみせる。大人の余裕を見せなければと思ったとか、強いと言わ

れて単純に嬉しかったとか、そんなわけではない。もちろん、勇者と旅で得られる数々の特典を思い浮かべて、思わずガツツポーズを取りしそうになどならない。

「——！」ヤ？

視線を向ければ、——ヤは天使の笑顔に腹黒さを滲ませて、

「いいんじやない？」

笑つてみせる。

「じゃあ、そういうわけだから。お兄ちゃん、コリアさんと一緒にヤさんの言つことよく聞いてね

「…………ん？」

先程とまつたく同じポーズでアメリカを迎え入れようと待機していたグレンは、頭の上にたくさんのはてなマークをくっつけてほんの少しばかり眉根を寄せた。

「お兄ちゃんは！ これから、勇者をまとめて、コリアさんと一緒にヤさんと一緒に世界中を旅するの！」

「何で？」

「だって、それが勇者まだまだもの」

「でもおれは、村に帰りたい。 煙のことも心配だし」

「煙は、あたしとおじいちゃんで何とかするから」

「でも、力仕事をじいちゃんに任せるわけにもいかんだろう」

「あら。 そのときは、村のひとたちに頼むもの、大丈夫よ

「でも」

自分の半分もない背丈の妹に人差し指をつきつけられて、グレンは田をぱちくりさせる。

「お兄ちゃん？ 剣は解き放たれてしまったの。お兄ちゃんは、もひ、勇者さまなの。観念しなさい」

「アメリカ」

「じゃあね、お兄ちゃん！ 幸運を祈つていいわ」

強引に言い切ると、アメリカはつま先立ちになつてグレンに近付く。つられてグレンが身をかがめれば、アメリカは頬に甲高いキスをひとつすると、スカートの裾を翻して台座から飛び降りると祖父のもとへと走り去つていく。

「アメリカ？」

片手に剣を手にしたまま呆然と立ち尽くすグレンの耳には、ユリアとニーニヤによる、オード語とヴェランデ語のアナウンスは耳に入つていなかつた。勇者と旅をすれば、自ずと名声が手に入るだろうと算段していた者たちはみな、そのアナウンスを聞いてがつくりと肩を落とす。かたわらのふたりの女性が、いわく、彼のパートナーであるらしいから。

「これ……」

ふと手のひらにある剣の重みを感じて、グレンが誰にともなく呟く。

「別に欲しくないんだけどな」

Scene 5 : Is it edible? (前書き)

はわわわわわわわ (蒼白)

気付いたらもう9月が終わってしまう!

こんな長い間更新しなかったのは、初めてです。すいません。

来月は、もう少し頑張りますので、見捨てないでやってください~。

コリアと二二ニヤが啞然としていた。開いた口はきれいな縦型の橿円形を描いていて、どうやら一人ともそうなつてゐる「」の姿に気付かないようだつた。ふたりはぽかんと口を開いたまま、まばたきすら忘れて、前方に見入つてゐる。ふと我に返ると、まばたきだけをせわしなく繰り返し、それでもまだ口はそのままで隣と視線を交わすと、また前方に向き直つて、今度はやや眉根を寄せてゆるゆると首を左右に振つた。

その一部始終を、グレンは何の感慨もなく見つめていた。

なんで、こうなったんだつけ。

思いながらふと手をあげれば、その中にはずしりとした剣が一降り、塚を握っているのは確かに自分の手だろうに、まったくその感覚がない。刀身には血が一滴付いていて、それを振り払おうと剣を振ると、己の頬にそれは飛び移る。

これが、勇者？

―――ヤガぱたぱたという擬音語が似合う走り方で、こちらに駆け寄ってくる。後方からは、ゆつたりと女豹のそれで歩むコリアの姿。

グレンのもとへ辿り着いた二一二ヤは喜色を露わに、両手を大きく左右に広げて見せた。

「すつ」
「なにが？」

「これ！　聞いてないよ～、グレンがこんなに強いなんてさ～」

「強い？　おれが？」

「そりだよう。　めちくち強いじゃん、あたし、びっくり。　ど

こで留つたの？」

「なにが？」

「戦闘の仕方。　あたしたちは、一応魔法学校を出てるんだけどね。そこで、たまに親善試合とかつていて、剣士とか戦士とかと模擬試合をしたことあるの。　でも、グレンみたいに強いひと、いなかつたよ！　まじでびっくりだよつ。　ねえ、ユリア？」

興奮した調子で一一ニヤガ振り返ると、すぐそばまで来ていたユリアが微笑んで軽く頷く。

「賞賛に値する。　グレン」

賞賛、の意味を考えながらグレンが曖昧に笑みを返すと、少女たちはやおら安堵した顔つきになつた。

「思わぬ拾いものだつたよね。　それに、てっきりあたしたちのことを恨んでるかと思つたら、そうでもないみたいだし」

「確かにあ、初めはどここの田舎者かと思つたから。　妹と離れた直後は廃人みたいになつていて、それこそ、何の役に立つのかも分からなかつたしなあ」

「そりそり。　アメリカちゃんが頼まなかつたら、こなんどんぐさうなの、面倒見るわけないじゃない？」

「そうだな、アメリカちゃんは、確かに、可愛かつたな……」

「あ、ユリア、顔が赤いよ？　さては、結構好みだつたんだな？」

「いやあ、そういうわけでは！　ただ、純粹に、可愛かつたなあと
いう話だ」

「はいはい、ま、どちらでもいいけど。とにかくさ、グレンは想像以上に強いし、ちゃん^{フィアツマ・パグリア}と戦闘でも役に立つてことが分かったし」「うむ、それに金穂の炎の威力は想定していた以上だつたな」「ほんと、ほんと。どこのぱっちもんかと思つてたけど、ちゃんと使えるもんだね。あんなアンティーケソード、料理に使うくらいしか使い道はないかと思つてたもん！」

「いや、私はそこまでは思つていなかが……」

と、この会話はすべてヴォランデ語で行われており、すなわち、グレンにはハエの羽音と同じようなものにしか聞こえなかつた。アメリアという単語が聞こえたのも、きっと気のせいだろう。

アメリカ。兄ちゃん、勇者なんてやめたいぞ。全然、楽しくない。

死屍累々と横たわるモンスターを眺めて、はあ、と切なげにため息をつく。

こんなモンスターたち倒したつて、全然楽しくない。森で狩猟をしていた方がよっぽど楽しかつた。獲物だって、もつとすばしつこかつたし。それに、こんなモンスター倒したつて、どうせ食べられるわけじゃないんだろう？　だつたら、何のために倒したんだか。あのふたりが、ユリアとかいうのと、ニーニヤとかいうのが、モンスターを倒せるかつて聞いてきたから倒しただけだ。なあ、アメリカ。これが勇者か？　兄ちゃんは、勇者はあんまり好きじやないぞ……。

「なあ」

グレンが初めて、コリアとニーニャに話しかけた。ここまでの道のりにおいて、アメリカを失ったショックから立ち直れなかつたグレンはいつも意氣消沈していく、それに少なからずの罪悪感を感じるふたりが必死に話しかけるという構図だつたから。

驚いた顔を隠すひまもなく、ニーニャが応える。

「な、なあに？」

精一杯可愛らしく笑つてみせる。それが徒労に過ぎないことは分かついても、だ。この重度のシスコン田舎男は、本気で妹以外の女性に魅力を感じないらしい。

「これ、食べれる？」

「これって……？」

訝しげに眉根を寄せて、グレンが剣先で指したものを見よつとコリアが上半身を傾ける。

「だ、だめだめだめだめ！」

コリアよりも視力の良いニーニャが、いち早く大きなリアクションを返すと、グレンは諦めにも似た嘆息をつく。

「やつぱりな。だつたら、何のために倒すんだ？ 食べられないんじゃ、意味ないじゃないか」

息絶えたモンスターの皮膚を、剣でつんづんしながらグレンが言う。慌ててコリアは両手を胸の前に広げ、制止をはかりながら、

可能なかぎり優しい笑みを浮かべてみせた。

「いや、あの。よ、よく聞け、グレン。お前が倒したのは、モンスターだ。『この世界に、モンスターを食す勇者がいるつていうんだ?』」

「じゃあ、勇者はモンスターは食べないのか」

「といつよりも、勇者でなくとも、モンスターは食べないと思つがな」

「じゃあ、やつぱり、無駄だ」

無駄死にだよなあ、と独り口ちて、グレンは血糊を払つた剣を鞘に収めた。宝石による魔力測定をしたこともなければ、モンスターだの勇者だのという意味を考えたこともない、そのくせ、農業で培つた体力と大自然の中で暮らしてきたが故に身についている天性の戦闘感覚を持つたグレンは、いわゆるエリートコースを進んできたコリアと一緒にやにとつて、まったく得体の知れないものだつた。

「なあ」

「な、なんだ?」

「おれは、いつ勇者をやめてもいいんだ?」

「うわ、ショッパンから消極的だね、グレンたら。一応、勇者つていつたら永久就職だからねえ」

「どういう意味だ?」

「簡単に言つと、一度勇者になつた者は、死ぬまで勇者だといつことだ。男に生まれれば、死ぬまで男であるよつにな」

分かり易いコリアの説明に、グレンが顔を青ざめさせる。

「死ぬまで……?」

「ど、どうしたの、グレン?」

わなわなと震えるグレンに怯えて、一一ニヤがコリアの陰に隠れる。

「それじゃあ、死ぬまでアメリカに会えないってことか……？　だつたらいつそ今死んじゃつた方が……！」

思い切りよく剣を鞘から引き抜くグレンに、一一ニヤがタックルをかましながら喚いた。ぴょんと身軽に飛ぶと、グレンの背中に飛び乗る。両脚で上半身を羽交い締めにして、その隙に、コリアが手際よく剣をグレンの手からもぎ取った。

「わーわーわー！　ちょっと待つて～！　早まらないでつてばあ！　グレンの面倒はちゃんと見るからつて、アメリカちゃんとも約束したんだから。こんな序盤で勇者自害なんてエンディング迎えちゃつたら、あたしとコリアがアメリカちゃんに血祭りにあげられちゃうから…」

「アメリカ……」

ヘーゼルの瞳に大粒の涙を浮かべて、グレンはえぐえぐと泣き始める。大きな体を丸めてしゃがみ込む姿は、大型犬のそれを彷彿とさせて、ふたりの少女はため息をつきつつも苦笑した。コリアの手にした剣は、それだけで手首が折れてしまいそうなほどに重くて、今更ながら、グレンの怪力に驚く。

「じゃあ、じゅじゅつよ、グレン」

人差し指を立てて、一一ニヤが微笑んだ。地面に座り込んでしまつたグレンと目線を合わせようとかがみ込むような姿勢になると、パーEでふくらんだスカートから太ももが際どいところまで見えてしまう。誰もいないと知りつつ、片方の手でスカートを押さえな

がら二一一ニヤは言った。

「勇者ってのはさ、まあ、色々と面倒臭い仕事もたくさんあるわけ。でも、その根っここの部分ってのはシンプルだから。つまり、人助けをたくさんしろってことなの。だからさ。どかんと一発、大きな人助けをして、世界中のひとにグレンが勇者だつてことを知らせてしまえばいいんじゃないかな。それならさ、アメリカちゃんだつて、グレンのことを喜んで迎えてくれるはずだよ」

「ほんとに……？」

への序口のまま、グレンがうつむくと光る瞳で二一一ニヤを見上げる。意外に可愛らしいその仕草に、不覚にも一瞬ときめいてしまってから、慌てて二一一ニヤは傍らにいるコリアと田を合わせた。こくりと頷くコリアを確認してから、二一一ニヤがアイドルスマイルを浮かべる。

「ほんとに。ね？　だから、もうちょっと、頑張ろ？？」

「……わかった」

「よし。決まりだな」

ユリアが言つて、立ち上がつたグレンに剣を渡す。塚を手にして刀身を見つめると、グレンは旅が始まつてからよつやく、素直な微笑みを顔に浮かべた。

「ユリア。二一一ニヤ」

「ん？」

「何だ？」

「よろしく」

差し出された手は、今まで知り合つた誰よりも大きく、厚く、そし

て純朴な匂いがした。少し照れ臭そうにそれに手を重ねると、ふたりの少女は声を揃えて、

「よひしぐね、グレン」

「よひしぐな、グレン」

「うん」

麦穂のよひつなブロンドを揺らりしてグレンが微笑み返す。

「あ。あれ、一応持つて行くか？」

「あれ？」

「モンスター。食べられるかもしれないから」

「いい、いい、いいよ、グレン！ 食べないから！ よしんば食べられたとしても、食べないから！」

「そつか……？ もつたいたいなあ」

名残惜しそうに言つて、グレンが手を引っ張られて、モンスターの残骸が散乱した地を後にする。

アメリカ。兄ちゃん、頑張つてみるな。早く会えるよ！」
早く、アメリカに会えるよ！」

Scene 6 : 拝啓、兄上わも（前書き）

またしてもものす一ヶ月時間が空いてしまいました。
申し訳ないです……。

今回で、Act 1は終わりです。次はIntermezzoかな。

Scene 6 : 拝啓、兄上さま

「アメリカ。兄ちゃん、頑張つてみるな。早く会えるよ！」。早く、アメリカに会えるよ！」。

と誓いを立ててから早一ヶ月。ディグオスでの生活の方が余程单调だったというのに、アメリカの元を離れてからの日々は、毎日が長く、グレンはすでに疲れ切っていた。

人助けをすると簡単に言ったものの、そろそろ助けを必要とする人物にはお目にかかれず。いや、実際には、グレンの純朴さに惹かれて近付いてくる老人たちはたくさんいたのだが、名の通った人物に関わらないと出世出来ないというコリアと、旅を続けるためにはとにかく先立つものが必要だからと言う一一ニヤのせいで、グレンは「こと」とくそうした老人たちに頭を下げ続ける羽目になっていた。

「そんな都合良く、有名でお金持ちなひと、いるのかなあ」

もつともなことを呟いて、はあと切ない吐息を漏らす。それからまた尻にじゅわっと涙を滲ませて、手にした山羊のミルクに映る自分の顔をしばし見つめた。

「アメリカ……。何でこんななつちやつたんだろうな。お兄ちゃんは、早く帰りたいよ」

わっと突っ伏すその姿を、半円型で囲むように眺めていた食堂の野次馬たちは、しかし、突風の勢いで入ってきたふたりの少女の姿を

認めてやつと離散する。「」の泣いてばかりいる、独り言の異様に多い青年がダラムにやつてきて「」。彼が、どうやら旅をしていることと、その仲間がふたりの少女であることを、食堂の常連は知つていたから。

「グレンー！」

ユリアが凜々しくも艶やかな声音で呼びかける。スリットの大きく入ったスカートを身に纏つた彼女は、歩く度にその脚線美を惜しむことなく見せつけていて、食堂の青年たちの視線を独り占めしていた。

「うわ、ああた泣いてるのお？」

舌つたずり言つて、「」ニーニヤがふんわりとふくらんだスカートをひらひらさせながらユリアの後につく。ニーハイから上の、通称「絶対領域」と呼ばれる皮膚はヴォランデ人にしては白く、食堂の中年男性たちの目尻を下げる効果をいかんなく發揮していた。

「だつて……」

情けない様相で「」グレンを哀れむように見るユリアと、少し蔑んでよう見つめる「」ニーニヤ。勇者がこれでは、男がめそめそしては、愛しのアメリカに申し訳がたたないと、グレンは勇気を奮い起こして涙を無骨な指で拭き取ると、少女たちに向き直る。

「グレン。時に聞くが

妖艶な瞳をすくと細めてユリアが尋ねる。

「お前、文字は読めるのか?」

「ううん」

わらわと首を振るグレンを見やつて、ふたりの少女は背中の後ろでがつちりと手を組んだ。己の勝利を確信するがごとく。

「なんで?」

当然の質問を投げかけるグレンの瞳は天使のように透き通っていて、少しばかり二二ニヤの良心を責め立てたが、それも一瞬のこと。にっこりと聖女の微笑みを浮かべてみせると、じゅーんといつ擬音語と共に一通の封筒を見せた。

「…………」

まったくの無反応が二二ニヤに浴びせかけられ、氣まずい沈黙が三人を覆づ。

「グレン! 何か言つてよ!」

「たとえば?」

「た、例えは、えつと、何それ?とか。誰から?とかさ。何でも良いから! もつたまつて見せてるあたしが恥ずかしいじゃない。ギヤグを外した芸人みたいな境地に追い込まないでよねー」

「げいにん? 誰?」

「グレン、ポイントはそこじゃないぞ。これだ。分かるか?」

手紙だ

「てがみ? 何それ」

「そそう、そういうリアクションが、つて……。ええええ、ちよつと待つてよ、グレン。もしかして、手紙の存在自体を知らない?」

大袈裟に驚いてみせると、手にかざした封筒をひらひらと左右に振つてみせる。犬や猫がそうするよつて、グレンは封筒の動く様を目で追いながら、

「だから、てがみつて？」

「手紙といつのはだな。文字による「ミコニケーション手段だ。紙媒体のものに文字を書き連ねる。それを郵便屋といつといふに持つて行くと、それが配達される」

「どこに？」

「その手紙を渡したい相手にだ」

「何で自分で渡しに行かないんだ？」

「距離が遠すぎて会えないとか、まあ理由は様々だろつよ」

「おれとアメリカみたいに？」

「グッド指摘！ そう、そうなのよ、グレンー 実はね、この手紙、アメリカちゃんからなの」

「ケティッシュなウインクを飛ばすも、グレンはいまいち状況を把握出来ずに首を傾げるばかりだった。だが数秒考え込んだ後、勢い良く椅子から立ち上がる。大柄なグレンは、その動作だけでコリアと二二ニヤに威圧感を与える。熊に立ち会つた農民の気持ちを、ふたりは瞬時に理解した。

「アメリカから!？」

「そうわづ、そつなのよ。中身、読んでみたい？」

そもそも、文字の読み書きはグレンも習つていたはずなのだが、その能力を使うことに意味を見いだせなかつたグレンは、何の躊躇もなくその能力を忘却の彼方に押しやつてしまつたらしい。そのことすらも覚えていない彼には、封筒に書かれた文字がアメリカの筆

跡とは異なることも、手紙にしては消印が押されていないことなどにも、もちろん気付けるはずがなく、一一一ヤの問い合わせに「こくこくこく」と小刻みに首を振つて応えるばかり。

「じゃ～仕様がないなあ～。グレンが文字を読めないっていふんじゃ仕方ないよね。親切なあたしが、代わりに読んであげるね」

こほん、と小さな咳払いをすると、一一一ヤはおもむろに封筒の中から数枚の紙を取り出し、読み上げ始める。

「グレンお兄ちゃんへ。お兄ちゃん、お元気ですか。お兄ちゃんが村を出で、立派な勇者ひととして名を上げるための旅へ出でからもう一ヶ月が経ちますね。コリアさんも一一一ヤさんも、きれいで可愛くて、優しくて強い冒険者さんたちなので、きっとお兄ちゃんもふたりと仲良くやっていることだと思います。お兄ちゃんは、ふたりと旅が出来て幸せだと思います。私は、元気に暮らしています。おじいちゃんも、元気だよ。お兄ちゃんがいなくなつたこの家は、少し寂しいけれど、私は負けたりしません。だって、お兄ちゃんも頑張っているんだもんね！　お兄ちゃんは、私のお兄ちゃんだから、きっとどこに行つても大活躍でしょうね。困つているお金持ちのひとを助けたり、賞金のかけられている悪いひとを捕まえたりして、いっぱい色んなひとから感謝されてお金をもらつたりして、るんでしょう。そのうち、お兄ちゃんなら、色んなところから声をかけてもらえるくらい有名になつて、お兄ちゃんを雇うだけでたくさんのが貢がれるようになつて、そうしたら、お兄ちゃんは勇者さまとして、コリアさんと一一一ヤさんと、その半分を渡したら良いと思います。ともかく、お兄ちゃん。お兄ち

ゃんはもつ、勇者さまなんだから。たくさんモンスターを倒して、たくさんのお金持ちを助けて、たくさん有名になつて、たくさんお金稼いでください。私は、いつもお兄ちゃんのことを考えてい

ます。お兄ちゃんのアメリカよつ

「アメリカ……」

ぼとぼと涙をこぼしながら、グレンが立ちになつて感極まつた声をあげる。

ぐるりと勢い良く反転して、テーブルの上のコップを掴み、残っていたミルクを一気に飲み干すと、

「よっしゃああああああ

と、無駄に暑苦しげにかけ声をかける。それから、ベーゼルの瞳に燃えたぎる炎をちらつかせて、そのがつしつとした腕でコリアとニーヤの肩に手をかけた。

「コリア。——ニーヤ

「は、は……」

そのあまつの情熱絵的な瞳に思わず、すぐみあがつてしまつふたりである。

「お金持ちを捜しに行こう!」

完全に手紙の内容を意訳し間違えたグレンは、声高らかにそつそつ言ふとい、

「うわじやあああああああ

などと雄叫びをあげて、盲目的に食堂を飛び出していく。行き先は、もちろん本人にも分かつていない。

「ニーニヤ」

「なに、コリア」

食堂の野次馬たちが、闘牛のとき疾走をみせるグレンの背中を眺めていたとき、その場に残された少女たちは小さくゴロゴロ語で言葉を交わし合つ。

「あの手紙が、お前の書いたものだとこいつとは」

「死んでも言わないって」

「よし。……しかし」

「うん。まさか、あんなに効果が出るとさね」

ちらりと視線を交わすと、にやりといったらしくぼく笑い合つ。——ヤガ手にした封筒をコリアに差し出すと、

「火炎」
フオーコ

封筒の角に突如として現れた炎は、見る見るうちに広がつていき、封筒も手紙も、黒炭となつて風にさらわれていぐ。それが消え去るのを見届けると、ふたりは、パン!と乾いた音をたてて手のひらを合わせた。

「じゃあ、いっちょ、お金持ちを探しに行きますか」「だな」

「えいひつ」

その声に答えてくれる者などこなことこの上、されども、そう咳かずにはねられない。

自分のじでかしたこの惨劇の意味を、少女はきちんと理解していったから。

自分のような、生きているのがおじがましい生き物が、まだおめおめと生き恥をさらしているところだ。それを享受してくれていた者たちに対し、こんなやり方でしてか、自分は愈えられないのかと思つと、田畠がするほど歯痒く、涙の根も乾いてしまつほどに情けなかった。

「おがいの」

顔を両手で覆つても、田畠をきつく閉じても、まぶたの裏には口の所業がはつきりと浮かび上がる。所詮、自分の罪から逃げることなど、不可能なのだ。

「おがいの」

こやいやをするように首を左右に振ると、銀髪が窓からの光を反射させて万華鏡のように輝く。その美しさを認めてくれる者は、もういない。乾ききったと思われた涙が、またしても頬を濡らす。その様を見る者は、もういない。

もう、誰もいないのだ。

「…………」

誰を憎めば良いのだろう？ 自分以外に、誰を責め立てれば良いのだろう？ 己の命を絶つことすらも許されない、この憎らしい体で、これからどうやって生きていけば良いのだろう？ もし、この世に神などが存在するのなら、どうやってこの苦しみを伝えれば良いのだろう？

「だれか…………」

濡れた頬をあげて、視線を胡乱に窓の外へと向ける。

外界に。

「わたしを、殺して……」

震える声で言ひてから、かたわらのベッドへと皿をやつた。

「…………クス…………」

呼びかける声は、しんしんと降り積もる沈黙の中へと消えて行き、少女はまた、後悔の涙をこぼす。

それを拭き取ってくれた指のあたたかさを思い出しながら。

そして、それがもう一度と手に入らない絶望を、骨の奥まで感じ取りながら。

ACT II ; Scene I : テティ・ベアの暴走

——「ヤが書いたとは知らずに、愛する妹アメリカからの手紙の内容に号泣し、尚かつ大変に感動したグレンは、燃えたぎるような使命感に包まれていた。

何かをせねばならない。勇者として、何かを。

その思いは、腰にした名剣『金穂の炎』^{ファイアツマ・バケリア}が放つ炎のように猛々しく、グレンの少し足りない頭脳のように若々しい熱情は、彼を無目的に走らせた。

ପ୍ରକାଶକ ପରିଷଦ୍ୟ ମହାନାଳୀ ମହାନାଳୀ ମହାନାଳୀ ମହାନାଳୀ

そこいらを通りすがるひとたちが、一様にぎょつとして田を見開くのにも全く気付かず、グレンはただただ、ひたすらに走った。真っ直ぐに走り続けようとして、そうそう、真っ直ぐの道路ばかりでない事実に直面すると、突き当たりにぶつかるたびに、またしても無目的に右に左に道が伸びる方へと走った。お世辞にも頭脳的とは言えないその戦略はもちろん、ただでさえ、アメリカに会えないと意氣消沈して街の構造を把握していなかつたグレンを混乱させる。しかして、急に止まることも出来ないと、グレンはそのまま、体力の持つ限り走り続けることにした。

その体力が、常人からは、遠くかけ離れていることなど、露にも知らず。

「もひ、 最低だよ！」

薄い口唇を突き出して、頬をピンクに染めた一一ヤが文句を垂れた。

「仕方ないだろ？！」

額につつすらと滲んできた汗を、手の甲でぬぐつてから、ユリアが肩をすくめる。

「普通さあ、走り去る？ 街の構造も知らないのにい？ 妹から手紙が来ただけで？ 勇者をまだからって？ 走つて、迷つて、何で止まらないの？ 何で、あたしたちを探そうとしないの？ それともなに、あたしたちなんて必要ないとか思つてるの？ もう、最悪だよう。あんな、単細胞で扱いづらい奴、あの剣がなかつたらどうの昔に路上に廃棄してるつづのつ。しかも、勇者勇者って言つけどさ、ぶつちやけ、勇者の意味なんて知らないでしょ、あいつ。ああん、腹がたつうー！」

肩で息をしつつも、両手を握りしめ、きーーと小動物のような声を上げながら地団駄を踏む。

すでに辺りはつづらと暗くなつてきてるので、幸い、ひとりコントを始めてしまった少女に、人々の視線が向くことはなかつた。相棒の喜怒哀楽の激しいことには慣れっここのユリアは、何となく首の後ろに手をやつて、ぐるっと周りを見渡してみる。

「帰巣本能みたいなものは、ないんだろ？！」

「え？ きそ、なんだつて？」

「帰巣本能。例えば、飼い犬が間違つて外に飛び出して行つてしまつても、そのうち家に帰つてくるだらう。あれのことだ」

「グレンに、帰巣本能があるかつて？」

ジト目で半笑いを浮かべる一一ニヤに、苦笑しながらも頷いてみせると、

「そんなもの、原始人のプロトタイプみたいなグレンにあるわけないじゃない！　せいぜい帰るんだとしたら、アメリカちゃんちじやないの～？　グレンなら、アメリカちゃんの匂いがするーとか言つて、どんな長距離でも走つて帰っちゃうそだよね」

確かに、とコリアが相槌を打つて、ふたりは爽やかにグレンのことを馬鹿にする。軽やかな笑い声を上げていたが、ふと、ふたり同時にあることに思い当たつて、その表情を強張らせた。

「今、帰られたら……」

「へり、と喉を鳴らしてコリアが言つ。

「絶対、一度とアメリカちゃんから離れない…………」

絶望的に目を瞠る一一ニヤが言えど、

「勇者なしの旅…………」

と、コリア。

「名前……」

「プロモーション…………」

「スポンサー…………」

「コネクション…………」

「お金…………」

狸親父か悪徳政治家のような単語を連ねて、少女たちは顔面蒼白になると、強い決意を持つてお互を見つめ合ひ、頷き合つた。

「グレンー！」

「グレン、どこだー」

「グレンやーい。ほーら、グレンの好きな山羊のミルクだよー」「二ー二ヤ、それはちょっと……」

「え、何で？ だって、いつも飲んでるじゃん、山羊のミルク」

「いや、そういうのじやなくて……」「

少女たちの姿は、次第に夕闇の中に消えていった。

食堂から飛び出してから、きつかり三時間後。 とつぶりと暮れてしまつた街並みは、ところどころに灯つたランプ以外の灯りは見えず、行き交う人の数もまばらないなつていた。

明らかなるアドレナリン過多で、体力を消耗する以外にその発散方法を見つけられなかつたらしにグレンは、しかし、ぴたりとその足を止めた。

うつすらと汗が滲んでいるものの、息はまったくといつて良い程あがつておらず。 ディグオス村の中でも驚異的といつよりも脅威的な体力を誇るグレンの無尽蔵なエネルギーは、最早モンスターと同レベルである。

「うん？」

小首を傾げれば、さらりと髪が流れる。その仕草には、通行人を微笑させるような何かがあつて、何人かはくすくすと微笑を洩らした。

本人は、まつたくそのような事態を飲み込んでおらず、ただ壁の一点を食い入るように見つめている。

「……」

真剣な眼差しで見つめるその姿からは、まさか、頭脳レベルが稚児並であることなど微塵も感じさせず、客観的に見つめても、意外と様になつていた。

背後からの跳び蹴りが、電光石火の勢いで命中するまでは。

「ぐえつ」

変声期中の蛙のような声を上げてグレンが前につんのめる。からうつじて壁にキスするのを防ぐと、ぽりぽりと後ろ頭を搔きながら振り向いた。

頬を真っ赤にした、自分よりも随分と小さいツインテールの少女が、烈火の如くグレンに怒鳴り散らしてきた。少女のやや後ろには、膝を折り曲げ、その上に両腕を置いて、はあはあと荒い息を繰り返す、褐色の肌の少女の姿も見える。

「この、馬鹿！ 単細胞！ 抜け作！ とんま！ 役立たず！」

「あ、二二ニヤ」

「あ、二二ニヤ。 ジヤ、なぐくくいっ！ あのねえ、グレン、あたしたちがどれだけの間、あんたを探していたと思つてるのよー！」

？」

「……ああ？」

「きいいいいつつ！ むかつぐ！ むつかつくわ！ その言い方！ まるでそんなの氣にしてませんでしたよ、みたいな言い方。むしろ、おれ別に悪いことしてないじゃん？ 何そんな怒つてんの、二一一ヤ？ 老化が早まるよ？ みたいな言い方つ！」

「あ、コリアだ」

「ひとの話を聞きなさいよう！」

むき——つと怒髪天を衝いた二一一ヤは、力任せにぽかぽかとグレンの胸を叩くが、異様に堅いそれはびくともしない。あろうことか、叩いている二一一ヤの拳がじんじんと痺ってきた。豆腐に鎌を打ち込む虚しさを味わった二一一ヤは、悔し紛れにグレンのすねを自身のブーツの一一番堅いところで蹴つてみせる。

「どうしたんだ、二一一ヤ？ 欲求不満か？」

「ああもう、グレンは喋らないで！ グレンの口から、欲求不満とかつて言葉を聞くと、何故だか無性に腹が立つから」

「そういうときには、あつためた山羊のミルクを飲むと落ち着くぞ。アメリカが眠れないときなんかに、よく作ってやつたりしたもんだ」

視線だけでひとを殺められるのではないかというほどの苛立ちを募らせて、二一一ヤの瞳が暗闇の中、ぎらりと光った。息を整えるのに必死だったコリアは、二一一ヤの暴走を恐れて、素早くふたりの間に入り込む。

「話の腰を折つてすまんが、グレン」

「ん？」

「ここに」と笑ったままのグレンは、幼い少女が抱えるテディベアを彷彿とさせて、コリアは心中でそつと息をついた。悪いやつではないのだが。

「どうやら、何かを見ていたようだが……。何か気になるものでも見つけたのか」

ジーせ、シスコン単細胞が見つけたものでしょ、虫とかじゃないの？ つたぐ、世話かけさせないでよね、と完全にへそを曲げてしまつたニーニャが毒づくが、グレンはその笑顔を崩すことなく、背後の壁を指さした。

「じれ

「ん？ どれどれ

グレンの体で遮られていて、コリアの位置からは何も見えない。疲労困憊しきつた脚を動かして、彼の背後の壁に近付く。そこには、ポスターのようなものが一枚、貼つてあった。紙の状態からして、まだ新しい。万年筆で書いたようだが、インクの滲みがところどころにあって、印象としては乱雑である。

「助けて、って書いてあるんじゃないのか？ これ

「ええと……」

グレンほどの野性味溢れる視力を持っていないコリアは、暗がりの中、もつとはつきりと判別しようと更に数歩近付いた。

「何て書いてあるの、コリアー？」

ポスターには何か絵のようなものが中心に書かれている。長くま

つすぐに伸びた髪を持った、どうやら幼い子供のような顔。襟元しかそこには含まれていないが、そのレースのようなものが幾重にも重ねられていることから、そこそこの身分の者だと思われる。そして、その絵の下に、滲んだインクでこう書いてあった。

『アレックスを、助けて』

さつと顔色を変えてユリアが振り返る。

「——ニヤ。仕事かもしれない。グレン、よくやった

ACT II ; Scene I : ハディ・ベアの暴走(後書き)

さあ、やっと話が動き始めてきましたね！
ブログを始めました。裏話などもしていく予定ですので、よろしか
つたら遊びにきてください。<http://sanjyo.exblog.jp/>

Scene 2 : 腹が減つてはなんとかひ

「——ニヤ。仕事かもしれん。グレン、よくやつた
「え、嘘。それって、もしかして、当たりつて?」

真剣な表情のコリアを見て、——ニヤが少し狼狽えたようにグレンとコリアを交互に見つめた。一度、同意するように頷いてから、コリアがポスターを壁から外す。手紙用の上等の紙であるそれに、うつすらと押し印が透けて見えた。

「あれ? ちょっと待つて? グレンも、文字読めないって言つてたよね?」
「うん。読めないぞ」
「じゃあ、何でこれの言つてることが分かったの? おかしくない?」

手にしたポスターを調べていたコリアが顔を上げると、——ニヤがグレンに詰めかけるように顔を寄せているところだった。しばしの間、グレンはきょとんとした顔つきで、それから、いつも自然に、

「なんとなく」と言った。思わず、コリアと——ニヤが、がくつと肩を落とす。

「ともかくだ。この、アレックスといつ少女について、調べないとな
いとね」

氣を取り直して提案するコリアに、——ニヤが顔を綻ばせる。

「調べるつて？」

「グレン～。アレックスなんて名前の女の子が、この世に何人いると思つてゐるの？」

「まあ」

「いっぱいいるの！」

「だから？」

「だから～！　ああ、あんたと話してると、ストレスが溜まるつ

！」

「まあまあ、一一一や。グレンは、人探しもクエストもしたことはないんだらうから。な？　グレン。このアレックスという少女が、どこの誰なのかを判別するためにも、調査を始めないとけないんだ」

「なんで？」

「でなきや、見つけられないだらつ」

「ふーん」

「ふーんつて……。グレン、お前、どうやって探すつもりだつたんだ？」

「村長に話しに行く」

「ここは街だ。村長はいない」

「じゃあ、街の偉いひと

「それで、その偉いひとに会つて、どうするつもりだ」

「アレックスってこが、迷子になつてしませんか？つて

「グレン……。お前、このこが迷子になつてゐると思つてゐるのか？」

「うん。普通、女の子は夕暮れ前には、家に戻つてゐる筈だからなあ。アメリカなんて、太陽が少しでも翳つたら、おれが飛んで迎えに行つてたぞ」

「うん……。そうだな……」

自分たちの常識が全く通じないグレンとの会話に疲労感を覚えて、

ユリアはあくまで優しく、それでもげつそりとした顔つきで、曖昧に相槌を打つ。ほら、ストレス溜まるでしょ？と、一ー一ヤが頭痛を訴えるユリアを介抱する。

「ともかくだ。聞き込みを始める前に」

眉根を寄せてこめかみを押さえるユリアの姿は、憂える未亡人のようだったが、朴念仁のグレンには何の効果も『えられず、ニーニヤにいたっては両手を挙げて、

「『はん！ とりあえず、『はんにしようよ。 あたし、おなかペっこペこ』」
と叫ぶ始末。

「お前らな……」

呟いたユリアの声には、はつきりとした苛立ちが込められていた。

「お、兄ちゃんのお帰りだ」

グレンが食堂に足を踏み入れるなり、活気溢れる中食事を楽しんでいた中年の男性たちが笑顔を向けた。三日間の独り言と一人芝居で、すっかり有名になつたものらしい。つられたように彼が笑いかけると、男性たちはこぞつてグレンの傍に寄つてくる。

「三日泣いていたかと思つたら、急に叫んで走り出すんだもんなあ。 頭大丈夫かい、兄ちゃん？」

リーダー格の男が言つてから、己の発言に気を良くしてげらげらと笑い声を上げると、周囲もそれに同調する。皮肉の定義を知らないであろうグレンは、首を傾げて男を見つめて、

「そうこうおっさんこそ、頭寒くないのか？ これから、だんだんと冷え込んでくるから、その頭じゅ辛いだろ？？」

邪氣のない顔つきで、男の薄くなつた頭頂部を指さした。アルコールだけではない赤に頬を染めて、男が目つきを悪くする。男が口を開きかけた瞬間、二二ニヤが高い声で割り込んできた。

「あああああ、もう、おなかペッこペッこ。 グレン～、早く注文しちゃおうよ。 あたしとコリアで席取りしてるから、グレンは何か適当に頼んできて。 はい、これ、お金ね。 全部渡しちゃ駄目だよ、ちゃんと、言われた金額分だけ渡してね。 これ以上の値段になることはないんだから、あんまり高い値段を言われたら、黙つて睨み返すのよ？ 分かった？」

過去に、足元を見られて、渡した現金すべてを持って行かれたことのある二二ニヤは、ぐどぐどとお金に関するうんちくを垂れながら、グレンをカウンターの方へと押しやつた。 気を殺がれた形の男は、腹いせとばかりにジヨシキに残つていたアルコールを喉へと流し込む。 ちらりと二二ニヤを斜めに見ながら、鎖骨の浮いた白い肌から続くけしからん胸と膨らんだスカートに口元を緩ませた。

「ねえ、おじさん」

「な、なんだよ」

急にこちらに向かって、男は驚いたように肩をびくりとさせる。 そんなことは構いなしに、コリアが先程のポスターを広げて見せた。

「この少女に、見覚えはないか？」

「ああん？」

「アレックスっていう女の子みたいなんだけれど、知らない？」

テレンシア領は、割と裕福なところなので、必然的に人口も増える。それら全てをしらみつぶしに探したのでは埒があかないとい、少女たちは聞き込みを開始した。子供の落書きのような絵ではあるものの、その身なりが良いこと、書かれた紙そのものが上等なことから、アレックスという名の少女は、それなりの身分であることをふたりは想像していた。相手が有名であれば、一般の市民にも、その名は知られているかもしない。この食堂で有力な情報が得られるなどと、虫の良い話だけを考えていたわけではないが、ものは試しにと、ふたりは外交用の笑顔を張り付けた。

「何だ、こりゃ」

「子供の落書きか？」

「しつかし、へたくそだなあ。うちの息子の方が上手く描けら

あ

「けつ。そういうのを、親ばかって言うんだよ」

「なんだと、お前こりゃ、何かついいやあ、娘の話ばかりじゃねえ

か

片手にジョッキを持ったまま、男たちはポスターに目を向けるが、すぐに話が脱線してしまつ。「めかみをぴくぴくさせながら、ニーヤが猫なで声を出す。

「あのおー、このことなんですけどー」

「これ、何て書いてあるんだ？ インクが滲んで良く見えねえが

リーダー格の男が、文字の書いてある場所を指す。たしかに、初めユリアが手にしたときよりもインクの滲みは激しくなっていて、文字はかろうじて読み取れる程度になってしまっていた。

「アレックスを助けて、と書いてあるように見受けられたのだが」

遠慮がちにユリアが口を出すと、一斉に男たちが彼女を見つめる。その驚いたような視線にかられて、ユリアが眉根を寄せた。鼻の大きな男が言つ。

「アレックスって言つたかい、お嬢ちゃん」

「あ、ああ」

「助けるつて？」

「ああ、確かにそう書いてあった」

「その似顔絵……。真っ直ぐの長い髪に、大きな瞳……」

やおら黙つてしまふ男たちを不審げに見つめるユリアと、一向に進展しない状況と一向に運ばれてこない食事に苛立ちを隠せない二一一ヤ。しびれを切らしたのは、空腹といつ一大事に直面している二一一ヤだった。

「何なのよう！ 知つてゐることがあるんだつたら、わざわざと言つてよね」

「嬢ちゃん」

労働階級特有の、がさがさとして節くれ立つた指が、二一一ヤの肩にかかる。一瞬、たじろいだ彼女に、男がやや怪訝に口を開く。

「二りやあ、アレックス・テレンシアだ」

「へ？」

「テレンシア公爵様んとの、跡継ぎつじだよ」

「え、ええええええ？」

空腹による力不足のために、いまいちの声量でしか叫べなかつたのが、ニーニャにとつては不服だつたが、相棒の金切り声を聞かずには済んだユリアは、そつと安堵の息を漏らしたのであつた。

Scene 3 : アレックス・テレンシア

「え？」

「うわあ、もしかして、今全部聞いてなかつたとか？」

ヘーゼルの瞳がまばたきを繰り返すのを見て、二二ニヤが心底馬鹿にしたように声を上げる。ニアは、長い髪を揺らして、がくりと頸垂れた。

「じゃあ、グレンは今まで、何を考えていたわけ」

「この毛虫、気持ち悪いねと同レベルの表情で、二二ニヤが尋ねる。

「アメリカ、元気かなとか。 アメリア、今日の夕飯は何食べたんだろうとか。 アメリアの「はんは、小さいこの作るには美味かつたなとか。 セスがアメリカだなとか。 アメリアは将来有望だなとか。 だけど、アメリカは誰にも渡さないぞ、とか。 アメリアを狙う男どもは、おれが片つ端から片付けていかないとなか。 アメリアに手でも触れたら、公開処刑だな、とか」

「つまり、アメリカちゃんのことしか考えていなかつたんだな」

「しかも、後半、何か物騒だつたしね」

やれやれとばかりに頷き少女一人を、グレンは矢張りぼんやりとした顔で見つめるのみ。

「ていうかさあ

ほぼ空になつた子羊のシチュードが入つっていたボールを脇によけて、二二ニヤが木製のスプーン片手に身を乗り出す。 小柄な彼女には

少々高い位置に設置された椅子では、足が地面にはつかず、ぶらぶらと両脚を宙に揺らせた。ずいと片肘をつけば、否応にもその豊満なバストが強調される。ヴェランダ人にしては珍しい、薄い青の瞳を細めると、

「グレンはさあ、あたしたちと旅をしていて、何にも思わないわけ?」

「二二二、一一一ニヤ」

新鮮なサラダの上に、びっさりと盛られたキノコのソテーをフォークでつつきながら、ユリアが眉をしかめた。食堂の鈍い光に輝く紺色の長い髪は、時折さらさらと流れ、それを疎ましそうに耳にかける仕草は、年齢よりも上の印象を『』える。

「いいじゃん。ユリアだつて、気になつてたでしょ?」「私は、別に……」「うつそだあ! だつて、こんなの初めてじゃない? 絶対、気になつてるはずだよ」「そりやあ、まあ、気にならないわけじゃないが……」「ほらあ

鬼の首でも取つたかのようご、二二ニヤが破顔する。それを煙たそうに見たものの、諦めたようにため息をひとつついて、ユリアは自分の食事へと視線を戻した。

「ど、いうわけだえ」「え?」「グレン! 正直に答えなさい? あたしたちと一緒にいて、何も思わない?」「腹減つたとか?」

「アーニーハービーじゃなくて！　あたしたちがつっこい、何か思わない？」

「二二二ーヤ、歯の端に肉の切れ端がくっつってるなあ」

「アーニーハービー、どっちかってこと、そいつが系で、つて、ええ！」

ぽんやりと食らひた指摘に顔を赤めて、二二二ーヤが空いている方の手の甲で、『るる』と口周りを拭つた。

「取れた？」

「うん」

「そ、それでねつ！　グレンとしげはわ、結局、あたしとコリアのどっちが好み？」

「……何をするときこ？」

「うわあ、すごい切り返し。　聞いた、コリア？　グレン、変態だよ。　分かつてたけど、むつりつりだよ。　何をするときこ？　だつてさあ。　やつらしへー」

これ見よがしのひそひそ声で二二二ーヤが囁つて、コリアが勘弁してくれとばかりに頭を抱えながら赤面する。二二二ーヤは、その童顔に反して、ときにもとも親父臭い発言をする。セクシー系で売つているコリアだが、そのへんのモラルは、そこいらの子供よりも高いので、正直、今の会話は彼女にとつては大変好ましくない。嵐がやつれと過ぎ去つてしまつよつて、沈黙を決め込むことにした。

ひゅ～ひゅ～、グレンのむつり～などと、無責任な野次を飛ばしていく二二二ーヤをじぎじ見つめたあと、グレンはぽんと手を打つた。

「分かった！」

「なにが？」

「二二ニヤは声がでかいから、きつと羊飼いに向いてる」

「…………はあ？」

「コリアもそう思わないか？ 二二ニヤの声があれば、きつと羊たちはびびって、すぐ言つこと聞くと思うんだ。 そしたら、牧羊犬も必要ないし。 二二ニヤだけで済む」

「何、あたしだけで済むってどういうこと」

「だから、牧羊犬の餌代とかさ、馬鹿にならないから。 それが、二二ニヤだけで済んだら、結構な節約だよなあ」

「あたしは、犬と同レベルか―――っ！」

叫んでから、傍らのコリアがくつくつと笑いを堪えようと、上半身を折り曲げて耐えているのを見つける。 コリアまで…と、悔しう涙を浮かべてグレンを見れば、

「あ。 二二ニヤの髪、ふたつに垂れてるから、なんか犬みたいだしなあ」

などとぼざく始末。

「これは垂れてるんじゃないの、結わえてるの！ そして、あたしの耳はここ！ 人間と同じ場所にありますから！ このツインテールじゃ、何も聞こえないから！」

「そんなの、知ってるよ

躍起になつて怒鳴り返せば、一向に空氣を読めないグレンの澄ました声が返つてくる。 弁の立つ相棒が、唸り声を出すだけにとどまっている状況に、ついにコリアが笑い声をあげた。

「なによつ、コリア。 ひどーいっ」

「すまんすまん」

「コリアは、何が良いかなあ」

言い出したグレンを遮つて、コリアが親切そうな笑みを浮かべる。自分が[冗談のネタにされると、どうしていいか分からぬ]コリアであつた。

「まあ、何はともあれ、私たちのどちらも、グレンの恋愛対象にはならないということが分かつたな」

「れんあい?」

首を傾げるグレンに、

「恋愛。恋だとか愛だとかの類だな。誰かのことを特別に好きになるということだ」

「おれとアメリカみたいな?」

「うう、そ、それは色々な意味で問題発言だな……」

顔を引き攣らせるコリアに代わって、立ち直つたらじい一一ニヤが目を細めてグレンを睨む。

「グレンへ、それは犯罪だからやめときなよ。一度の過ぎたシスコンでむつつりで無神経つてだけでも、すでにキミの男としての価値は最悪なんだから~」

「ん?」

今ひとつ事情を飲み込めていないグレンが、ポテトの欠片と炙り焼きにされた肉を口に放り込む。もぐもぐ、と健康優良児らしい食べっぷりを見せる彼を、少女たちはやれやれと見守つた。

「まあ、あれだよねえ。」——んなグレンでも、もしかしたら、
公女さまには心奪われちゃうかもね」

「ふふ。案外、それもありえるかもしけんな」

「ひやふへほひやひよ？」

「今、絶対、誰?って言つてないでしょ」

未だ、もぐもぐと咀嚼を続けるグレンを見下げるから、——ニヤ
が笑顔になる。

「なーんと！ グレンが見つけたポスターの女の子情報が、既に
見つかってるんだなあ あたしたちつたら、優秀う～」

もぐもぐもぐもぐ。充分立派な歯を持つているくせに、何故か
ゆっくりと食べるグレンが口を開くのを、居心地悪くふたりは待つ。
やがて、コリアが後ろ頭を意味もなく搔こつかと手を伸ばしたこ
と、やつとグレンは「さ」めり、と大きな音を立てて飲み込むと、そ
のまま、豪快に山羊のミルクを飲み干した。

「え、なんて？」
「だからっ！」

がくじと今宵何度も田かに頃垂れるココアを横田じ、——ニヤが両
の拳を振り上げる。

「あの、ポスターの女の子！ 誰なのか分かつたって言つてるの
つー。
「誰？」
「~~~~~つー。」

言葉にならない苛立ちを、強く歯ぎしりする」とで見事に表現し

てから、ふに「——」ヤが立ち上がる。くぬつときびすを返すと、

「あたし！ 食後のお茶買つてくるー。コリアの分も買つてくるねー。」

と言い残して、すた「——」ヤとその場を後にしてしまう。

「——」ヤ……」

押しつけやがったな……と、歯痒そうに——ヤの背中を見つめるコリアは、しかし、観念したようにグレンに向き直る。ミルクのせいで、白いひげを鼻の下にこじらえたグレンは、にこりと邪氣の感じられない笑顔を見せた。

「あのポスターの少女は、アレックス・テレンシアといつそうだ。御年十六歳。——、テレンシア領を収める、テレンシア公爵の人娘らしい。テレンシア公には、他に——子息などおられなにようだから、彼女が正式な跡継ぎだそうだ」

「ふうん。えらいひとなのか」

「……。そ、そう！ そうだ！ エ、えらいひとなんだ、グレン！ よく理解してくれたな」

世間知らずの田舎者のグレンと過ごしてきた日々によって、相手に求める理解力のハードルが、既に地上すれすれに下がっていることにも気付かず、コリアは思わず頬を上気させた。

「その、公主さまなんだがな。どうやら、ここいらでは有名らしい。なんでも、頭脳明晰、容姿端麗、留学などもされていないのに、何カ国語も操り、芸術、経済にも精通し、しかも、一度お姿を拝見するだけで、夢見心地になるほどの美貌らしいぞ」

「ふ～ん。どうこう」と？」

「つまり、めちゃくちゃ美人ってことだ」

あまりにもめちゃくちゃな意訳だったが、グレンは、ほほつと感嘆の声を漏らした。

「アメリカよりか」

真顔で聞かれて、つい、

「かもしけん」

答えると、

「何言つてんだ、コリア。 アメリカより可愛くて、キレイで、将来有望なこ、この世のどじにもいないんだぞ？ 何だ、コリアは結構世間知らずなんだなあ」

はははと快活に笑うその首を、ぎりぎりと締め上げたい欲望と闘いながら、コリアは暗澹とした笑い声をそれに重ねた。

scene 4 : ハローカムシールアリスト考察（前書き）

ほんとうにひっそり更新が遅れてしまつて申し訳ありませんでした。

誰これ？！のグレンっての？何でこんなに馬鹿なの？

とか

何このーーーヤつての、叫んでばつかりじやん？

とか

ユリアつてひと、可哀想……

とか

そもそも、何なの？！こいつ

とか思われた方、ごめんなさい。作者の怠慢のせいです。

次の更新は、なるべく、なるべく、早い田こ……。

Scene 4 : ハロおけるシユール・リアリズム考察

あんぐりと口を大きく開いたまま、ふたりを見比べる一一ニヤと、眉根に深い皺を刻み込んで、額を手のひらで覆い沈痛に目を閉じたままのユリアのあいだで、グレンはぱちぱちと何度もまばたきを繰り返した。

「……なんで？」

それが、一一ニヤの必死の思いで紡ぎ出した言葉だったが、

「なにが？」

あつさつとかわされて、歯を食いしばり憤怒の形相を見せつけるが、グレンはここに」としたままだった。

「グレン」

見かねて、ユリアが口を開く。

「お前、本当に持っていないのか？」

「なんだつたつけ？　あい、あい、あ……」

「I.D。　身分証明書だ」

「それって、どんなの？」

つい先程、ほんの一分ほど前にも見せたはずなのだが、と思いながら、ユリアが丁寧に四つ折りにされた紙を取り出し広げてみせた。

「これ、何て書いてあるんだ？」

「……読めないのか」

「だから、言つたるー。おれは、字が読めなくても良いんだつ

て」

「なんで」

憮然とした顔のまま、二一一ヤが問う。

「だつておれ、農民だもん」

「ああああ、いまのなし、いまのなしね、おじさんー」

三人の掛け合いで漫才のようなやり取りを黙つて見守っていた、テレンシア領関所番の男性に、二一一ヤが愛想笑いを振りまく。

自分よりも遙かに高い位置にある、グレンの首元に腕を伸ばしてひつつかむと、ぐいと引っ張つた。

「ちよつと、何で二二一に顔を寄せてくれないの?」

びくともしないグレンに、唇を尖らせると、

「ん? なんで?」
「いいから、ちよつと二二一に来い、グレン」

顎で、門番から離れた位置にある、質素な木造ベンチを示して、コリアが先にそちらへ向かう。グレンが急に動いたせいで、引きずられそうになりながら、二一一ヤも後を追つた。

「もう一度聞くぞ。グレン、お前が成すべき」とは何だ
「アメリカのところへ、一刻も早く帰ることだ」
「……。そうだな……。そのためには?」

と、思わずこめかみを押さえてしまいながら、ユリア。

「やつせと勇者になる」

「そのためには？」

「有名人に、おれが勇者だって世間に言つてもらひ」

「有名人といつのは、ここの場合は？」

「あ、えと、あ、何だつたつけ。あ、あい、あいでいー？」

「それは身分証明書だ」

「あ、そつか。えつと、何だつたつけ。あの、ポスターの」

「アレックス・テレンシア」

「そうそう！ 金づる！」

「そうこつ」とは大きな声で言わなくて良いつ」

「えー？ だつて、やつて出したのは一一ニヤじゃないか」

叱られて、拗ねたように一一ニヤを見やれば、当の本人は空々しく口笛を吹いていた。

「アレックス・テレンシアを助けなければいけない。ここまでは、分かるな？」

「うん。だから、さつせと行こつ。その、何とかつてひとんとこりに」

「だからつ！ そのために、ここの関所に来たんじょーがつ！ そしたら？ 勇者だぜとかつて息巻いてる誰かさんが、ID持つてないとか言い出すから、ややこしいことになつてるんでしょーう？ ていうか、そもそも、何でID持つてないの？ 何なの？ グレン、あなたは一体何なの？ 今日^き、お金持ちのペットですらID持つてたりするんだよ？ ジャあ何、グレンはペット以下なの？ 馬鹿だ馬鹿だと思つてたけど、常識の全く通じない田舎者だとは思つていたけど、グレンはそんつつつつなに家畜に近い人間なの？ そ

れとも、人間ですらないわけ？ どうなの、そんとこつ！」

怒髪天を衝く、という形容詞のぴたりくる形相で、ニーニヤが白い肌を上気させて叫んだ。興奮しやすい質で、尚かつおしゃべり好きな彼女は、気分が高まると同時に早口になる。事実、最後の方は、渡り鳥の大群を思わせるノイズのようにしか聞こえず、慣れなユリアですらも訝しそうにニーニヤを見つめるばかりだった。

「とりあえず、だな。 グレンのHDLを何とかしないと
はあ、はあ……。 そ、そうね」

息も切れ切れに「一、二、三」が頷くと、やおらグレンににじり寄る。

「ユリア！」

絶妙のタイミングでユリアがグレンを背後から羽交い締めにする
と、その隙に一ニヤがグレンのポケットをがさー」と漁った。

「な、何するんだ」

「どうせね、グレンのことだから、本当はＩＤくらいい持つてるんでしょうよ。だって、ＩＤがないなんてそんなこと、あり得ないもの。だから、残ってる可能性としては、グレンの頭が本気で悪すぎて、ＩＤを持つていることを忘れてしまったか、ＩＤをＩＤとして認知していいのか、そのどっちかだって」

「...ユリア?」

特に抵抗するでもなく、グレンは眉をハの字に下げてユリアを困ったように見た。

「二二ニヤの言つてゐる意味が分からぬ、か？」

「うん」

「後で説明してやるから、今は大人しくしていろ」

「うん」

大きな嘆息をつくユリアだったが、グレンの呆れ返るほどに純朴な笑みに、やれやれとかぶりを振つた。

「おし！ あつたり～！ やつぱあたしつてば天才！ 頭良い！ 勘も良い！ ついでに、可愛い！ くうづ、天は二物を与えたり！」

くしゃくしゃになつて、尚かつ何度か水を吸つて乾いたらしい紙切れが、二二ニヤによつて取り出された。 誇らしげに歯を見せると、紙切れに素早くキスを繰り返す。 今にも踊り出さんばかりの振る舞いに、グレンが首を傾げる。

「……ユリア？」

「放つておいてやれ、グレン」

「うん」

グレンが、放置という優しさの応用をユリアから学んでいる間、二二ニヤはいそいそと紙切れを広げると、

「どれどれ～？ ほうー、やつぱり持つてるんぢやない、ID！ 嘘をつけつてのよね。 ええと？ ほほう、あたしとユリアよりもひとつ上なのね。 意外と童顔よね、グレン。 それで、肝心の職業はつと……。 うん！」

満面の笑顔がさつと曇つたかと思つと、さめゅつと皿を睨つて、「こ

じ「」と田元をこする。かと思えば、まるで重度の近視に悩むかの如く紙切れに顔を近づけ、はははと乾いた笑いを繰り返し、そして最終的には笑いたいのをこらえていようつた、いっそ泣いてしまいたいような、お手上げだと言わんばかりの顔でコリアを振り返った。

が、もちろん、グレンの背後にいるコリアには、その表情はグレンの大きな胸中に遮られてしまつたく見えず、図らずもグレンと同じように首を傾げるのみ。

「コリア～」
「ど、どうした、ニーニヤ」
「もお、やだあ」
「な、何がだ」
「グレンの職業欄が……」
「何が書いてあるんだ？ 白紙なのか？」
「ううん、ちゃんと書いてあるよ。くつきりはつきり、間違えよつのないようて、むしろ惡々しきへうりに濃い字で書いてあるよ」
「何て？」
「農夫つて！」
「なー！」

職業に貴賤はない、と信じている人間愛に溢れたコリアだつたが、あまりのことになると声を上げてしまう。

仮にも、これから貴族の娘を助けに行こうと、勇者として名を上げようと、名剣と讃れ高い『金穂の炎』^{フィアッマ・パグリア}を手にする者が、農夫とは。

シユール過ぎる。上質のブラックジョークのような展開に、コリアは目眩を覚えた。その感覚が、日常的になりかけている自分

の今の生活にも、シユールレアリストが忍び寄つて来ているのだろうか。何と、恐ろしい。

「のまま、何も知らなかつた頃に回れ右して走り去つてしまいた衝動を押さえると、コリアは半泣きの一ニニヤにぎこちなく微笑んで見せた。

「だ、大丈夫だ、一ニニヤ。か、カモフラージュ。そう、カモフラージュだよ。

農夫というのは、カモフラージュなんだ」「

「そつか！ 勇者つてばれちゃうと、ねずみ小僧的クオリティが損なわれるから！」

「ねずみ……？ 何だ、それは」

「異国のカルトヒーローだよ。この間、東からやつてきたつていう商人のおっさんからもらつた絵本に書いてあつたの」

「そ、そつか。グレンはカルトヒーローか……」

この期に及んで、まだぼんやりとへらへら笑い続けているグレンの牧歌的な横顔を見つめて、コリアは眩いた。

「何と、シユールな。

「とりあえず一旦は、問題解決ね！」

立ち直りの速さでそこいらの雑草よりも定評のある一ニニヤが、すつと背筋を伸ばして輝くような笑みを浮かべる。

「ああ、待つてなさいよ、アレックス・テレンシア！ ちやきちやき助けに行ってあげちゃうんだからっ！ おじさん！ HDありました——」

ぱりぱりの紙切れを頭上高く掲げて、ニーニヤが閑所番に走り寄つていぐのを見ながら、グレンはこうこうと笑顔のまま、

「お？ 何か二二ニヤ、楽しそうだな。 何か良いものでも見つけたのか？」

目眩を伴う頭痛から解放される日が、じきじきと遠わかつていぐのを切に感じながら、コリアはグレンに頷き返した。

scene 5：グレンべー誕生日会、田中特訓中（前編）

あわわわ……。

お久しぶりです、とかいつものも譁れるよつた更新スピード本邦に
「めんなさこ」。

もし万が一、これを楽しみにしてくださった希有な読者さまが
おられましたら、ありがとうございますと、「めんなさこ」を呪文のよ
うに呴えたいと願こまかー。

Scene 5：グレンくん開発部隊、田中特訓中

さわさわと揺れる森の葉っぱも、遠くから聞こえてくる鳥のさえずりも、たしかにヒーリング効果を持つていそうなものなのに、コリアの頭痛は治まるところを知らず、一一ニヤのストレスレベルは本人の意思とは裏原に、どんどんと上昇していくようだった。

「もう一度。もう一度、おさらいしようか……」

苦虫を、奥歯で「じじじじじじ」つぶす勢いでコリアが口を開くと、

「なにを？」

と、神経を逆撫でするの「うひうひ」なグレンの返答。

「う！」

だから…あんたが、さつきから聞いてきてることでしょう！
何で忘れるかな、それとも何、今までのそれは全部独り言なの？
体力ばつかりつけて、脳みその発育が遅れてる農民勇者さまは、結局、アメリカちゃんのことしか記憶出来ないよくな、おつむの痛い、役立たずなの？

数々の罵倒の言葉が一一ニヤの脳みそを駆け巡ったが、下唇をしつかりと噛むことで、何とか抑えた。すーはーすーはーと何度も深呼吸を繰り返す。彼女の胸を凝視することに集中しまくつていた親父が、いつぞや、彼女に教えてくれたリラックス方法だ。効果があるのかは定かではないが、大抵の物事など、気の持ちようなのである。親父は結局、はあはあと荒い息を上げながら、両手を

気持ち悪く動かして近付いてきて、一一ニヤの容赦ない蹴りが顔面に炸裂したので、呼吸法の奥義とやらせ教えてもらえたかったことが少しだけ残念だったことを思い出した。

「グレン。これはね、アメリカちゃんにも関連する」となの」「何！ アメリカに！」

皿を細めて、新たなアプローチを試みれば、完全なる一一ニヤの勝利であることが、グレンの上氣した頬から伺いみられる。

「よしっ！」

心中でガッソポーズを取り、尚かつ、交わした視線で勝利の愉悦を味わいながら、一一ニヤとニアはグレンに向かって精一杯の優しい微笑みを向けた。

「グレン、お前の職業はなんだ？」

「農民！」

「違うでしょう！」

即答したグレンの後頭部に、一一ニヤの突っ込みが舞う。

「え～？」

「グレンの職業は、勇者… ゆ・う・しゃ… 分かるー？」

「グレンが勇者になることを望んでいるのは、どこの誰だ？」

「アメリカ！」

「そうだ！ そして、そのアメリカちゃんを世界で一番大事に思っているのは、どこの誰だ？」

「おれ！」

「そうやう、その調子！ そりでもって、そのアメリカちゃんに

褒められたいのは、ビルのだあれ?」

「おれ!」

「いいぞ、グレン! では、アメリカちゃんに喜んでもいい」と
を、世界で一番喜ぶのは、ビルの誰だ?」「

「おれ!」

「そうだよね! じゃあ、グレンが勇者さまになつて、アメリカ
ちゃんが喜ぶんだつたら、グレンは勇者やまになるよね?」

「うん!」

「では、グレン。 お前の職業は?」

「ゆ、えつと……」

「ゆ・つ・しゅ」

小声の一一ニヤの顔をちらりと見てから、グレンは面々と宣言を
する。

「勇者!」

「素晴らしき!」

「すばらしいわ、グレン!」

赤ん坊が初めて立つたときの母親の興奮そのままに、一一ニヤと
ユリアは、両の手で拳をつくるグレンを、心なしか潤んだ瞳で見つ
めた。

「と、こつわけで、初めの質問に戻るんだけどね」

「ん?」

「あしたちの、職業。 ちゃんと、説明してなかつたでしょ?」

小首を傾げて尋ねる一一ニヤを、コリアが援護射撃する。

「私たちの職業も、アメリカちゃんの勇者としては知つておきた

ことじるだからな

「おうー。」

「しめしめ……」

「しめしめ?」

「あ、今のは独り言ー。忘れて、忘れてー。」

「おうー。」

単細胞で良かつた、と胸を撫で下ろした一一ヤが、一部のおり様たちであれば、たちじこじて財布の中身をぱらぱらとくくる笑顔を作つたが、グレンはへりつと笑い返すのみだ。

「じゃ、まずはあたしからね」

「うん」

「あたしの職業は、賢者。回復魔法とか、防御魔法が得意なの

「なんだ、それ?」

「うんとね、例えばね、怪我をしきつたりするでしょ?」

「うん」

「そりこいつのき、瞬時に治せるんだよ」

「へえ、すごいなあ。牛とかが唾液で傷を治すの一緒だな」「……、いちこち、動物と比較するの、やめてくれない?」

「なんで? 牛は、良いやつだぞ?」

「いや、良こいやつかどうかは知らないから……」

眉を顰める一一ヤの肩を叩いて、コリアが努めて明るい声を出す。

ちょっと失礼、と言しながら、一一ヤがグレンの腕を取り、袖

「どうだ、一一ヤ。デモンストレーションしてみれば

「あ、それ良いねー。」

をまくる。あらわになつた筋肉の美しい腕に、腰に差していた短剣をあてがえると、すつと薄く皮膚を切つた。いや、正確には、切つたと思った。その頑丈な肌は、まるで鋭利な刃物など受け付けないとこつた風に、傷といったようなものは全く見受けられない。

「えつと……」

「くすぐったいよ、一一ニヤ」

へへへ、ヒ笑うグレンを、気持ち悪そうに見上げて、一一ニヤが後ずさつた。

「コリア、あいつやつぱり変態だよ。ぶつちやけ、怖いよ。単細胞の筋肉バカつて、肉体的な傷すら付かないってことなの？」

「どうなんだろ？　な……」

「ほん、と咳払いをしてから、コリアがしゃなりとその美脚を惜しげなくむしりしてから、一步進み出る。

「私の職業は、魔導士だ。一一ニヤの賢者とは対をなす職業でな。主に、攻撃魔法を得意とする」

「ふーん。それって、役に立つか？」

「つ！　た、立つ！　失礼な」

「だつて、魔法つて、詠唱時間があるんだろ？」

「な。何で、お前は魔法の詠唱時間のことを知ってるんだ」「アメリカが言つてたから。アメリカは、何だつたっけか。

精霊使いになりたいって言つてたな」

「それは、魔導士や賢者のトップにたつ職業だな」

「アメリカにぴったりだな！」

「……そうだな」

「で、その精霊使いつてこつのは、どうやつたらなれるんだ？」

「グレンは、魔力検定はしていないと言つていたな」

「うん、してない」

ふ、とため息のような息を漏らしてから、コリアが氣怠そうに腰に手をやつた。そこいらの健常男子であれば、ひれ伏したくなるような姿ではあるが、またしても、グレンは目をぱちくりと瞬かせるのみだった。

「生まれてくる子供は、>透明な魔力<^{イル・レガーユランスパレンテ}と呼ばれる無色透明な石を持たされるんだ。それは、個人の魔力の質量によつて、その色と性質を変化させる。魔法には、様々な種類があり、それらは、光・闇・火・水・風・地の六種類に分けられるんだ。例えば、火に特化した魔導士は、石がルビーになるし、地に特化したものは、ガーネットを持つ」

「真剣に話を聞いているグレンに微笑むと、コリアが傍らのニーニヤを見やる。すると、彼女は阿吽の呼吸で、

「それから、特殊枠で、魔法使いと精霊使いつていうのがいるのね。大抵の魔導士は、ひとつ^{エレメント}の資質にだけ特化しているんだけど、希に、すべての資質^{エレメント}を使いこなせる魔導士が存在するんだよ。それが、魔法使い。ただ、魔法使いは、全ての資質^{エレメント}を使える代わりに、魔導士ほどの魔法威力がないことが多いんだけど、魔導士と同等の威力か、それ以上の威力を持ち合わせていて、尚かつ全ての資質^{エレメント}に精通しているのが、精霊使い。精霊使いはレア中のレアでね、百年に一人とか、二百年に一人しか生まれないって言うの」

と、流暢な説明をした。

「で、アメリカはどうやつたら、その精霊使いになれるんだ?」

「まー、てつとり早いのは、^{イル・レガーロラン・スパンテ}透明な魔力くを持たせてみる」と
じゃないかなあ？」

「それは、どうで手に入るんだ？」

期待に充ち満ちた瞳を向けるグレンを、コリアはしばし直視したあと、意味ありげに流し目で微笑むと、

「それは、もちろん、グレンが勇者だと名前を上げれば、すぐに手に入るだろうなあ」

とだけ言った。

「よしー、早速、行こつ！ なんとかつて金づるを助けて、さくさくおれが勇者だと世界に知つてもらおう！ それで、アメリカは精靈使いになつて、おれはアメリカと一生幸せに暮らす！」

大股で、意氣揚々と森の中を進んでいくグレンの背中を、してやつたりの笑みで見つめたユリアが後を追う。その笑みを目の当たりにしたニーニヤは、ユリアの新たな一面を発見した気がしてならないのだった。

scene 6 : 嘘のメカニク、非常識の有効活用（前書き）

ちよ、ちよつとは更新速度、ましになりましたか？（でもまだ遅い）

夏休みに入りましたので、頑張つて更新していくたらと思つておりますつ！よろしくお願いします。

感想など頂けると、すこーく励みになります。

Scene 6：嘘のメリッジ、非常識の有効活用

「あ

ぱつりと、凡庸に呴かれた声にて、ニーニャとコリアが、先を歩いていたグレンへと視線を向ける。

「え？」

同じように元通り聞き返したときだった。

雄叫びのようなものが鼓膜を震わせたかと思えば、しなるよじて鞄から抜かれたグレンの剣が、その頭部を容赦なくまっぶたつに切り裂く。あつという間に、ふたりの少女の目の前には、ぐくどくと血を流し、身体を痙攣させて地にひれ伏すモンスターの姿が横たわった。

「す、」

思わず、素直に感嘆の言葉を口にして、ニーニャが慌てて、手で口を覆つた。グレンじときを褒めてたまるかとでも言いたそうにして。

「……」

抜きっぱなしの刀身をそのままにして、グレンが佇む。幅の広い肩幅は、頼りがいのある、と形容したくなるような背中につながる。黄金の麦穂に良く似た髪は、時折吹いてくる風に、ひらりひらりと揺れて、少しだけ斜めに傾いた横顔は、まるでお伽噺の勇敢

ГЛАВА

モンスターの痙攣は、今や収まつており、無言のそれをじつと見つめるグレンは、ふと、切なそうにため息をついた。

「……グレン。忘れてはこなことせ思つが、それは食べられんぞ」

おそれおそれ苦言を呈したコリアを振り返ると、グレンはもう一度、今度は盛大に息を吐く。

「分かつてるよ。 もつたいない。 本当に、食べられないのか

「当たり前だ」

「何でそんなこと知ってるんだ？」
「あるわけないだろ？」「食べたことあるのが」「

言つて、鼻でせせら笑うと、何故かグレンの顔が明るくなつた。

「じゃあ、分かんないんじゃないか！」

片眉を上げて問い合わせば、グレンは白い歯をきらりと輝かせて、ついでにヘーゼルの瞳もきらきらと輝かせて、につこりと微笑む。

「だって、そうだろー？ 食べた」とないんじゃ、食べられるかどうか、分からぬじやないか」

「いや、ちょっと待て、グレン。 だからって、そのモンスター

を今食べる気なのか?」

「いや、今食べなくてもさ。取りあえず、解体だけしちゃつて、必要な分だけ持ち歩いてさ」

「あたし、嫌だからねつ! そんな、モンスターの肉持ち歩くの、絶対嫌だからねつ!」

「つらすりと青くなつた顔で、二二ニヤが抗議の声を上げれば、

「わがままだなあ、二二ニヤは」

と、窘められる。

「わがままとか、そういう問題じやないでしょつ! ていうか、本氣なの? グレン、やめなよ、やめといつよ、そういうのはさあ。田舎者で馬鹿でおつむぱつぱつぱーの勇者つてだけで、結構真剣に、あたし、恥ずかしい思いとかしてるんだからさあ。その上、変態で重度のシスコンで、しかもモンスター食べるなんてことが世に知れ渡つたら、あたし、生きていけない!」

「なんで?」

「説明するのも、嫌!」

「じゃあ、分かんない」

「あ、何それ! 何で無視するの? 何で? 何で、ちやんと説明してよとかつて言わないの? グレンのくせに生意氣つ!..」

「本題に戻る!」

真顔でグレンが言えば、二二ニヤはあんぐりと口を開けたまま固まってしまう。飼い犬に手を噛まれる、とはこのことかっ! と、その見開いた両の瞳が叫んでいる。

「二二ニヤもココアも、こいつが食べられなこと思つてるんだろ

? でも、食べたことはない

「ぐりと、疲れた顔で頷くコリアを認めて、グレンが満足そうに口元を緩めた。

「じゃあ、食べてみれば良いじゃないか」

「だから……。何で、そういう結論に達するんだ、お前は」

「だつてさあ。食べたことないんじゃ、食べられない、とは決めつけられないだろ?」

「それが、有毒だつてことは考えないのか」

「ああ、毒キノコみたいなもんだろう? 勃いを嗅げば、大体のことは分かるよ。それに、ちゃんと火で炙つて食べるから。それなら、問題ない」

「道徳観というものはないのか」

「邪魔だからって殺した生き物を、野ざらしにする方が、よっぽど無責任だと思つ」

「……」

今まで、馬鹿にし続けてきたグレンの、理に敵つた反論に、コリアは驚愕の表情を隠せないでいた。

「ちよ、ちよっと待つてくれ、グレン。な? ちよっと、ちよつとだけだから」

「ちよっとだけだぞー」

鷹揚に頷くグレンに、愛想笑いを見せてから、コリアは一いつ瞬の襟首をつかんでグレンから遠ざかる。ひそひそと顔を寄せ合いつつ、

「どうす、一いや」

「やこみ。いや」と止めなこと、あれは絶対、食べちゅうよ。

「めぐらし」

「分かつてゐる！だから、どうしたら良いのか、聞いているんだ」「やっぱさ、あたしたちが食べてないのが、やばかつたんじゃな
い？」

「まさか、あんな結論に発展するとは思つていなか
「でもさ、あたしたちもそろそろ、常識の受け答えをするのに、
氣を付けた方が良いかもよ。何てつたって、グレン、明らかに非
常識だから！」

「そ、それもそうだな。そ、そうだ、私たちも食べてみようとしたことがあると言つたらどうだ？ 食べてみようとしたが、食べられないといふことに気付いたと。 それなら、グレンも諦めてくれるだう」

「諦めてはくれるかも知れないけど、そんなこと言つたら、今度どこかの街に行つたときに、あたしたちがモンスター食べようとしあつて、大声でひとに言いふらすかも知れないじゃない？ それつて、またしてもまずくない？」

「そうだな。グレンならやりかねん。な、ならどうする?」「えっとね……。うん、あたしに考えがあるよ。使い回した方法だけど、どうやら、これが一番、グレンには効くみたいだから」「よし。任せたぞ、一一二ヤ」「

思い詰めた顔でお互いをじばし見つめ合ひ、一度だけ額き合ひついで、決意に満ちあふれた目をグレンに向けて立ち上がる。

グレン、と声をかけようとした。

じつとりとした目つきでしゃがみ込み、横たわるモンスターを観察しているグレンの真横から、その仲間と思われるモンスターが飛び出していくのが見えた。あれほどまでに優れた反射神経と運動神経を見せつけたグレンだったのに、目の前の肉候補で頭がい

つぱいなのか、それとも脳みその許容量が異常に少ないのか、近付いてくるモンスターには一向に気付く気配がない。

「そのままいけば、グレンがやられる。金づる！ 名声！ 将来！！

そう思つたのも束の間、ニーニャとコリアの体が自然に動いた。

手の平をグレンに向けて、コリアが叫ぶ。

「ブロテクション
防壁！」

半透明の魔力の球体が、グレンの頭上に現れたかと思えば、瞬時に卵の殻のように彼の全身を包み込んだ。

「カバシジン
風牙！」

両腕を交差させ、それから腕を真っ直ぐにモンスターに向ける。ニーニャの爪先から生まれ出た風の刃はたちまち、グレンに距離を縮めていたモンスターの身体を切り刻み、遂には仰向けに倒れさせた。

「グレン、大丈夫か？」

駆け寄ったコリアに、グレンが顔を上げる。ぴくりともしなくなつたモンスターの巨体とコリアを交互に見てから、ふと首を傾げた。

「今さ、コリアがおれを守ってくれた？」「あ、ああ。今のは私の魔法だ」

グレンに怪我のひとつないことを認めて、ほつと息をつきながら答えれば、セーヒグレンが首を傾げる。

「じゃあ、あいつを倒したのは?」

「それは、あたしだよ。魔法でやつつけたの」

少し遅れて歩み寄った二一一ヤが、はにかんだ微笑みを浮かべて言つ。眉根を所在なく寄せて、先程とは反対方向に首を傾げて、グレンは、

「魔導士が? 攻撃? 賢者が? 防御? あれ? ユリアが……?
魔導士? 二一一ヤが? 魔導士……?」

しまつた。両者の顔には、まきりとそつ書いてあつたが、とりあえず、取り繕つた笑顔を浮かべてみせる。

「あ、あのね。グレン。これには深い訳があつて……」「そう。そなんだ、グレン。ちゃんと聞いてくれ」「嘘ついたのか? 一人とも」「え? いや、何て言うか、だから、あの、ちょっと込み入った事情があつてね」

恨めしそうに見上げるグレンの視線に、焦つて上ずつた声を返せば、

「じゃあ、あれだろー。このモンスター食べられるつていうのも、どうせ嘘なんだろー。ちえー。ふたりとも、すぐおれをからかうんだもんな」「…………え?」

あたふたとせわしなく両手を動かしていた一一ニヤが、ぴたりとその動きを止めた。そろりとコリアを見れば、言いかけた言葉を「ぐくりと飲み込む姿。

「……そ。 そうなんだよ！ すまない、グレン。 ちょっとし

た、「冗談のつもりだつたんだ！」

「い、いやあ、まつさか、グレンが本気でモンスター食べてみたい！なんて言ひとは思わなくってさあ！ あははー。『ごめんごめん』

「つたぐー。 ふたりが、おれに食べて欲しそうにしてたから、なんか怪しいと思つたんだよなあ」

「し？ してたっけ！？ あ、し、してたかもね！ あ、あはは！」

「そ、それはすまなかつたなあ、グレン」

乾いた笑い声を上げながら、少女たちは、改めてグレンの思考回路の予測不可能さに下を巻いていた。誰がモンスターの肉を勧めるか！ という当然至極な突つ込みも出来ず。

Scene 6 : 嘘のメリット、非常識の有効活用（後書き）

次はIntermezzoを挟んで、Act IIIでは、少し過ぎに戻ります。

ユリアが防御魔法に長けている訳、

ニーニヤが攻撃魔法に長けている訳、

グレンが突っ込んでくれなかつた部分を書きたいなど（苦笑）。

Intermezzo：皮肉なお城のひそひそ話（前編）

またしても、大分間があいてしまって、恐縮しかりです……。
今回のIntermezzoは前回とPrologueとは違う人間の視点で書かれています。

たらたらと、お馬鹿な三人が繰り広げてきたこのお話ですが、
ここいらでようやつと、流れが変わってくるかもしれません。
どうか、気長にお待ちくださいませ。

Intermezzo：皮肉なお城のひそひれ話

Intermezzo II

「いやなんばずじやなかつた」

何度、その言葉を聞いたのだろう。

生まれたときから、その言葉に囲まれていた気がする。

自分のせいではないのに。

そう、これは自分のせいではない。

なのに、皆、あたかもこれは自分の責任であるかのように罵りつゝの
だ。口をそろえて。

「計算外だった」と。

拳を握りしめて、怒りに震えたこともある。人知れず、涙が頬を伝うままに空を仰いだこともある。知ったことではないと声を荒げてしまいそうになるのを、口唇から血が滲むほどに噛んで、自分を律したこともある。言葉で反抗する代わりに、わざと周囲を困惑させるような行為に及んだことがある。

すべて、徒労に終わった。

こま、心に残るのは、ただただ、ひたすらの、虚無感。

それとも、自分は「すべて」を試していないだけだろうか。

「すべて」出し廻くせば、何かが変わっていたのだろうか。

不毛極まりない、「たら」と「ねば」の世界の中で、自分は、何を見つけられるというのだろうか。それこそ、非生産的で不毛だ。

そんな役立たずの自分を、鏡の中で自虐的に笑う自分を嘲り、一笑にふしてみせても、やっぱり何も変わらないのだ。

「いんなはずじゃなかつた」

気付けば、その言葉を口にしていたのは、自分だ。

なんて、皮肉な。

自分を笑い飛ばすのにも疲れ果てて、周囲を振り回すのにも嫌気がさした頃、あれに出会った。

それを、ひとはて呼ぶのだろう?

運命?

それとも、人生の仕組んだ、新たな狂言?

どちらでも構わない。

何故?

それは、誰かに理解してもらわねばならないことではないから。
誰かに説明しなければならないものではないから。

それはとても、滑稽な狂言だったから。 それはとても、自分に
おあつらえ向きの運命だったから。

自分じゃない自分になりたいなんて、それまで思わなかつた。

まだ物心もつかない時に握られた、魔力検定の石は、はつきりとピンクパールに変化して、それはつまり、自分が癒しの魔法を使う者だと決められた瞬間でもあつた。

魔力検定の石は嘘をつかないと、何度も周囲に諭されたけれど、どうしても諦められなくて、なけなしのお小遣いで石を手に入れては、何度も試してみた。どうやっても、ピンクパールしか手に入れられないと悟ったときには、身長が伸び始めていた。

十一歳で入った魔法学校で出会つた二ニーヤと同じくらいの背丈だったはずなのに、いつ頃からか、どんどんと彼女のつむじが見えてしまふくらい背は伸び続け、二ニーヤの身体が女らしく成長する中、自分の身体は棒つきのよつなまま。ヴェランデの太陽を吸収し続けた肌は、冬が巡つてきてもなめし革のように艶やかまで、せめてヴェランデ北方に生まれていれば、もつとガラス細工のような肌になれたのだろうかと思う。女は声変わりはしない、なんて聞いていたのに、自分の声はどんどんと低く掠れて、まるで煙草常習者のよう。煙草なんて、吸えないのに。

こんな風になりたかつたわけじゃない。

もつと幼かつた頃に、なりたいと思い描いていた自分の姿とは到底異なる現実に、少々の不満は覚えど、悲嘆に暮れていたわけじゃない。

あの日が来るまでは。

「ゴリア！ ゴリア！ ゴリア！ ゴリア～～～～！」

一一ニヤのよく通る声が、自分の名を呼び続けながら、徐々にこちらに近付いてくる。その声量が増してると同時に、周囲を歩く人間が、好奇の目でこちらを振り返ったり、はたまた、その音の大きさに顔を顰めたりするのには何の興味も引かれず、一一ニヤは同じ単語を繰り返しながら一直線に走つてくる。

「なんだ、一一ニヤ。 あんまり大きな声を出すな。周りの人間の鼓膜のことも考える」

苦言を呈しつつも微笑すれば、一一ニヤはふくらりと頬をふくらますと、

「大声出さいでかつてえの！ 大ニユースなんだからっ！」

「ほう？ また、部屋に蜘蛛が出たとか、そういうことか？ しかも、小指の爪サイズの。だとしたら、それは大ニユースとは言わんということを、そろそろ学んだ方が良いぞ」

「もう、ゴリアはすぐそうやって、あたしのことをからかうんだから。違うの、今日は本当に大ニユースなんだってば！」

ここで一一ニヤは思わずふりに目を軽く見開いて、ゴリアの反応を試すようになる。しばしの間、大ニユースとやらに思いを馳せてみたものの、お喋り好きの幼なじみと違つて、日頃からゴシップという名のニユースを取り入れる習慣のないゴリアには、さっぱり見当がつかなかつた。

「なんだろうな

「聞きたい？」

「言いたい、の間違いだらう?」

「いやもちろんそうだけど、え、なになに、知りた~いって言われた方が、言う本人もテンション上がるつてもんじゃない?」

「ふふ、なるほど。是非、聞かせてもらいたいな

「じゃあ、教えてあげる!」

満足そうに歯をみせる二二ニヤを、柔らかい目で見つめて、コリアは次の言葉を待つた。

「転入生だつて! 残念ながら、あたしたちの学年じゃなくつて、一個上なんだけどね。 それがね、ただの転入生じゃないの。 すつごい才能あるこなんだつて。 しかもね、しかもね、なんと、真正銘のお姫様なんだつて~~~~。 すぐくな~い?」

「お姫様?」

「口クサンヌ公国^{クサンヌ}の公主様らしいよ」「すごいな、魔導士のサラブレットじやないか

口クサンヌ公国は、その所有する魔法騎士団の強さにおいて、世界随一だ。

「でしょでしょ、すごいでしょ。 しかもね、校長先生直々のお達しがあって、シーニヤ先輩と相部屋なんだつて! すつつつつ「くべない? ?」

シーニヤ・エモリスは、ひとつ上の学年に在籍する、二二ニヤの憧れの先輩だ。 通常、十一歳からしか入学を許可されていない、全寮制魔法学校に、十歳で入学。 そればかりか、齡十三歳にして、世界でも数名しか授与されないという『聖^{サン}』^{サント}の称号を与えられた、凄腕の賢者。 今現在、世界で唯一の『聖なる白賢者^{サント・ジンゴ}』である彼女は、女子高であるこの学校において、王子様のような存在で、だか

ううん、誰も彼女と相部屋になることは許されていない。

「でもまた何故、転入生と？」

そんなことをすれば、転入生が、全校生徒からの嫉妬の的になるのは、目に見えているというのに。

「ううん、なんかね、詳しいことは分からんんだけど、知り合いたいだよ？ ほら、シーニヤ先輩って、お仕事とかで学校の外に出ることが多いじゃない？ だからじゃないかなあ」

「ああ、なるほどね……」

ありえない話ではない。

「二二ニヤは、羨ましいとかはないのか？」

「いやあ、そりやあさ、シーニヤ先輩と四六時中一緒にいられるなんて、超一羨ましいけど。でもあたし、コリアと相部屋の方が好きだから。シーニヤ先輩と一緒にいても、緊張しちゃって、何も喋れなくなっちゃうしね」

そう言つて、照れた笑いを浮かべる二二ニヤに、素直に感謝の言葉が告げられず、ついついコリアは話の矛先を自分から逸らした。

「何言つてるんだ。二二ニヤは、シーニヤ先輩相手でも、よく喋るくせに。つと、噂をすれば」

田配せをした先には、シーニヤ・エモリスの姿。小柄ながらもグラマラスなその体型はと、艶やかな黒髪のおかつぱ頭は、どこにいても人の目を引く。他人とつるむのを好まない彼女は、大抵、ひとりで颯爽と歩いているのだが、今日はそうではなかつた。隣

に、彼女と良く似た背丈の少女の姿がある。

「あ、シーニャ先輩だ。あ、ねね、隣のこつてもしかして、例の転入生？ わお！ あたしつてばラッキー、もう遭遇出来ちゃつた。 てつきり、午後の全校会合まで待たないといけないかと思つてたのに」

独り言にしては大きな声で呴いてから、二一一ヤが大きく手を頭上にかざして左右に振つた。

「シーニャせんぱーい。 シーニャせんぱーい！」

聞こえないはずがない二一一ヤの大声に、シーニャ・エモリスは軽く視線をこちらに向けると、隣の少女に何事か囁いて、一人揃つてユリアたちの方へ歩き始める。

「シーニャ先輩！」

「なんやねんな、二一一ヤ。 そない大声出さんかて、充分聞こえるつちゅうねん」

神秘的な湖を彷彿とさせる翡翠色の猫耳をいたずらっぽく輝かせて、強い北ヴェランデアクセントでそう言った。 少しつづけんどんな物言いも、彼女が言つと、不思議ときつく聞こえない。

「転入生が入ってきたって聞いたんですけど」

持ち前の好奇心を發揮させて、二一一ヤが甘えた声でそう尋ねれば、シーニャ・エモリスはくすりと口唇を蠱惑的に歪める。

「おお、おお。 情報の早いこと。 なんや二一一ヤ、壁に貼り

付いて「シップ收集してばかりで、ちゃんと魔法の勉強してへんのんとちやうんか」

「あ、ひつじー。あたし、じゅみえても、勉強はちやんとしてるんですよ」

「じゅみえても、ちゅうじとま、不眞面目にみえる自分をちやんと認識しとる、ちゅうことやな。結構、結構

「ちゅーーー

なんだかんだと言ひて、シーニヤ・エモリスに好かれているニーヤが、じゃれ合つような会話を続いている間、ユリアは傍らに立つ少女を観察していた。

柔らかそうな栗色の髪は、赤いシルクのリボンでポニーテールに結わえられ、真新しい制服から伸びる手足は、東方の陶器を思わせる滑らかさ。利発な色を見せているベーゼルの瞳は、ニーヤたちの会話を注意深く見ていて、高貴な薔薇に良く似た口元は、うつすらと微笑の形をとつていた。

そこまで不羨に見ていたつもりはなかつたものの、その佇まいから溢れ出んばかりの気品ある雰囲気に圧倒されていたユリアは、当の本人がゆつくりとユリアに向き直つたことに気が付かなかつた。

「お、すまんすまん。紹介すんのがまだやつたな。ニーヤ、ユリア。これがその転入生や

「リオ・スシールです。はじめまして」

「こりと微笑んで、こなれた仕草で上流階級の会釈をしてみせる。鈴を転がすような声には、ロクサンヌのアクセントはひとつもない。

「初めまして、あたし、——ニヤ・ガルダスです」

「言つた——ニヤの肘につつかれて、よつやく、コリアも我に返つたように口を開く。

「初めまして。コリア・モースタンです」

「じつちも、うちらのこつこドの学年や。コリアは賢者、——

ニヤは火の魔導士や」

「あら。じゃあ、まるであたしとシーニヤみたいね」

聰明な瞳を無邪氣に丸くして、リオ・スシールが言つ。

「どうこう意味ですか？」

「シーニヤは賢者でしょ？ コリアちゃんみたいに。あたしも、
火の魔導士なの」

「えー、超偶然」

ともすれば馴れ馴れしく聞こえる——ニヤの言葉に、公女である彼女は驕傲なところはまったく見せず、素直に頷いた。

「ね 素敵な偶然」

「スシール先輩は」

「リオ。リオで良いわ」

「ほんとですか？」

「ええ。だって、シーニヤのことは名前で呼んでいるでしょ？ だったら、あたしのことをわざわざ^{アベシード}名字で呼ぶことはないわ」「えつと、じゃあ、リオ先輩」

「なあに？」

「リオ先輩、呪文詠唱のクラスつてもつ出ました？」

「呪文詠唱つて、なあに？」

「え？」

魔法には呪文がつきもので、呪文詠唱の善し悪しで魔法の精度が左右されるといつても過言ではない。呪文詠唱のクラスは、実技と同じくらい重要視されているクラスで、ここで生徒たちは呪文詠唱のスピードの上昇、及び効率の上昇を学ぶ。基本中の基本に首を傾げる少女に、コリアとニーニャは思わず目を丸くした。すると、呆れた顔でシーニヤ・エモリスは、

「ああ、こいつな、あかんねん。変人やからな。呪文詠唱、したことあらへんねん」

「したことだが、ない？……と、いうと？」

「なんていふか、イメージ出来ちゃうの。あ、こいつことなんだろうなって思つたら、その言葉が頭の中に浮かんで、それを言つたり思つたりするだけで、魔法が発生しちゃうのよね。今日、教えてもらつたの。それって、変わつてるんだってね」

「な？ 変人やろ？」

もう、とふくれてみせる少女を見たとき、初めて思った。

自分以外の人間になりたいと。

愛くるしい容姿に、気品溢れる仕草。あくまでも上品な立ち居振る舞いに、努力しても得られないほどの才能。

それが目の前に現れてようやく、コリアは、自分の「憧れ」を認識した。

幸か不幸か。

Act III ; Scene 1 : 憧れは時として唐突に（後書き）

リオとシーニャは、実は別の作品の登場人物であります。彼女たちには彼女たちのお話があるのですが、シーニャとユリアの人生にも関わっているので、今回は、特別出演のような形で。

Scene 2 : 理不^可な世の中と人々（前編）

Scene 2 : 理不尽な世の中と少女心

「どうしてこうも、人生は、自分の思うままにならないのか。何かが間違っている。

気候に恵まれたヴォランテでは珍しく曇天が広がる窓の先を、二二ニヤがなんとはなしに見つめながら、そんなことを考えていた矢先に、ユリアが疲れ果てた顔をして部屋に戻ってきた。

「疲れた……」

掠れて呟くその声さえも艶っぽい彼女は、ぱたりとベッドに俯せに倒れ込む。向かい側に置かれたベッドの上で胡座をかいていた二二ニヤは、いそいそとユリアの傍に場所を変えると、よしよしとその藍色の髪を撫でてやる。

「おかれり。どうだつた？ 今日の買い出しへ」

寄宿生は、基本的には学外に無断で出ることを許されではおらず、それは特待生とて例外ではない。その校則とは別に、寄宿生が学外に出ることを求められるときがある。週に一度、順繰りに回ってくる買い出し班は、学生六人で成り立つており、チームを組んで学校の設置された街の中心で、全校生徒用から集計されたアンケートのうち、特にリクエストの多かった日用品や嗜好品を買い出しに行くのが役目だ。生徒数が多いため、週に一度の役目でも、実際に順が回ってくるのは一ヶ月に一度くらいなものだが、これがユリアの悩みの種だった。

「何でみんなにわらわら寄ってくるのか分からぬ。私が

何か変な物質でも撒き散らされているとでもこうんだらつか

情けない声は、枕に音を吸わせて、ますます痛々しい声音になる。

卷之三

二〇一〇年

無言の肯定が、ユリアの後頭部から発せられる。

「ほんと、何でなんだろうね。コリアはや、どこに行つても、なーんか知らないけどM属性つていうの？ 僕をぶつけてくださいユリアしゃま～、私を蔑んでくださいユリア様～みたいなひとに好かれるじゃない？」

「なんだ迷惑だ」

温厚で、ひとの悪口を滅多に言わないコリアにしては冷たく言い放つ。

「あたしはあたしどり、買ひ出しどりで街中に出るたんびに、変なおっさんたちがわらわら寄つてきてしまふ。お嬢ちゃん、おつちゃん」とちよめちよめせえへんかー的なことを言われるじゃない?」

いつもは使わない、北ヴェランデアクセントで戯けた風に言つてから、二ニニヤは顔を盛大にしかめると、

「良い迷惑よね、まったく。」ソーナは興味ないつひのつ。

ね！と同意を求めるれば、ユリアは枕につつぶしたまま、じくりと首を縦に振る。やや大袈裟にため息をついてから、ニーニャは天井を仰ぎ見て口唇をとがらせた。

「あたしがちょっと人より胸がでかくて、ちょっと身長が低くて、ちょっと声が口リ声で、ちょっとふわふわしたスカートばつかり穿いてるからって、あたしがロリータだつてことにはならないのにね。これしか似合わないんだつつの。それにさあ、ロリータだからって、おっさんが好きとは限らないでしょ。ロリータだつたらみんな、おっさんと付き合うのかつての。ユリアだつてさ。ちょっと人より背が高くて、スレンダー美人で、ちょっと脚線美がひとよりもえろくて、肌が浅黒いんがこれまたセクシーで、ちょっとスリットの入ったロングスカート穿いてるからって、即、女王様気質だとは限らないじゃない？ ユリアって、どっちかつていえば癒し系だし」

一気にそこまで言つてから、もう一度、先程よりも大きなため息をついて、

「あ～あ。シーニャ先輩が羨ましい！」

「そつ言つ——ニヤの顔からは、嫉妬の色はまったく見えず、純粹な憧憬のみが頬に色を添える。

「だつてやー、シーニャ先輩つてば、あんなにグラマラスでセクシーなのに、ちゃんと優しくて、凄腕の賢者だし、なんていうかあれなんだよね、ギャップ萌え？ 色っぽくて癒し系つて、ほんと憧れる！ しかもさ、色っぽいっていつも、いやらしい感じじゃないし、おっさんとかに、お嬢ちゃん、おじさんと良いことしちゃうとかって言われる雰囲気じゃないし。 ああもう、何であたし魔導士なんだらうー！ 賢者になりたかったよ！ そしたらさ、ローラータの白衣の天使って感じで、それはそれで良いと思わない？ 今からでも転職出来ないかなあ。 賢者クラスつて、もう今年はいっぱい

んだっけ？」

絶え間なく髪を梳いていた一一ニヤの手をやんわりと止めて、コリアがゆっくりと寝返りを打つ。横田で、シーニヤ・エモリスの雄姿に思いを馳せている一一ニヤを見やつて、コリアは小さく息を漏らした。

「そうだな……。そんなことを言えば、私は、転入生が羨ましい」

「リオ先輩？」

「そう……。私と同じで胸だか尻だか分からぬ体型だが、スシール先輩は小さくて可愛らしい感じだろう？　それに、声だって私みたいなだみ声じやないし、肌だつて透き通るみたいに真っ白だし、妖精みたいな容姿に、完璧に上品な仕草で、しかも凄腕の魔導士だぞ？　格好良すぎだろ？」

ほひ、と切なそうにため息をつくコリアは、校則では許可されないハイヒールを仕込んで、ふわふわと横に広がるスカートに身を包んでいる一一ニヤと目を合わせると、

「世の中、なかなか思い通りにはいかんもんだな」

「ほんと、世の中つてあたしたちに喧嘩売つてるよね」

真面目な顔で頷く一一ニヤの言葉に、思わず吹き出すると、二人してくすぐすと笑い合つた。

Scene 3 : そして君は微笑み、言葉は溶ける

雨が、ヴォランテでは珍しい雨が、じとじと降り続いている。窓の下半分は蒸氣で曇り、窓枠が時折、風に煽られて、かたかたと小さな音を立てる。

白い木で出来た窓枠に、小指の爪ほどの小さな引っ搔き傷を見つけた。

こんなもの、前からあつただろうか。

そう。いつから出来たのか、いつからそこにあったのか。そんなことにも気が付かない。自分の周りにあるものはすべて、これからもきっとここにあるのだろうと思つていい。

愚かな。

自分を、大きな声で嘲り笑つことが出来たら、少しばかり晴れるだらうか？

そんな考えを頭の隅に押しやり、ユリアは、涙で瞳を潤ませているニーニヤに焦点を戻した。

「いつ、聞いたんだ」

「つい、さつき」

「その……、本当なのか？」

「だつて、本人がそう言つてるんだもん」

「いや、もちろん、それはそうなんだが。しかし、なんというか、急過ぎないか？」

「知らないよ、そんなこと…」

「——ニヤ……」

「あたしだって、シーニヤ先輩がそんなこと考えてたなんて、まったく知らなかつたんだから。あたしは、ただの後輩で、シーニヤ先輩の親友でも何でもないし、シーニヤ先輩と一緒にお仕事したことだつてないし。そもそも、比べるのが悲しくなるくらいレベルの違うひとなんだから。でも、あたし、シーニヤ先輩には、可愛がつてもらつてのかなつて思つてたの。だから、こんな形で、こんな風に……。ごめん、ユリア。ユリアに当たり散らしても仕様がないよね。やっぱ、ちょっとショックなんだと思う」「それは仕方のないことだらう。私のことは、気にするな」

そのニュースを、——ニヤが運んできたのは、ほんの数十分前。ドアを破壊しかねない勢いで開けて入つてくるなり、床に崩れ落ちるように座り込むと、「あたしの人生、もう終わつた！」と大声で泣き叫び始めた——ニヤを、ユリアは目を丸くして見つめた。それから、何度も瞬きを繰り返して、精神の落ち着きを無理矢理取り戻し、——ニヤの肩を抱いて、何事かを聞き出した。

「シーニヤ先輩が、シーニヤ先輩が一学校、辞めちゃうんだって！」

絞り出すように紡がれた言葉は、もちろん、——ニヤの口から出たものだつたので、蚊の鳴くよつた声とはほど遠く、代わりに、ユリアの鼓膜をびりびりと揺らした。

「嘘だろ？？」

それくらいしか、ユリアには返せず、そしてそれは、ある意味真実だつたと言える。

シーニヤ・エモリスという存在は、今や、学校の代名詞であり、
彼女が『聖』^{セイント}の称号を得たその翌年には、入学志願者が五倍になつたといふ。彼女のカリスマ的な立ち居振る舞いは、各国の魔導士協会からも絶賛され、生きた伝説のように扱われている。

その彼女が、学校を辞めるといつのはすなわち、炭酸飲料から炭酸を抜いてしまうということだ。炭酸の抜けてしまった炭酸飲料に、果たして何の魅力があろう。そして、彼女を師と崇め、尊敬し、彼女に追いつこうと必死に鍛錬を重ねてきたニーニヤにとつて、まさに「人生の終わり」に最も近いことであることは、容易に想像がついた。

ぐすっと大きな音を立てて鼻をすするニーニヤを、ユリアは同情を込めて見つめた。

リオ・スシールがいなくなれば、自分もこんな思いに駆られてしまうのだろうか。

その時だ。控えめなノックがあつて、ニーニヤとユリアの名前を呼ぶ声がする。

「ビ、どうぞ」

その声の持ち主に、すでに落ち着きをなくしたまま、ユリアが返事をすれば、扉が開いて彼女が部屋へと足を踏み入れた。

「今、大丈夫かしら?」

彼女 リオ・スシール は、ほんの一瞬だけ、泣き顔のニーニヤを見やつて目を瞠つたものの、何事もなかつたののように微笑んでみ

せん。

「あ、はー」

答えてから、やにわに、彼女が座る場所を探しているのだと気づき、コリアは慌てて部屋の備品である椅子を、学習机の下から引つ張り出してきた。どうやら、と差し出せば、ふわりと微笑して、優雅に腰をかける。

「あたし、あんまりまじめにしてことは好きじゃないの。だから、単刀直入に言つね」

いつも潰刺とした顔つきで、リオ・スシールがゆっくりとヒーリヤとコリアの瞳を順番に見つめ、

「明朝、あたしも学校を出て行へわ」

「……え？」

「シーニヤが出て行つてしまつのは、もう聞いたのよね？」

「あ、はい」

シーニヤ・エモリスの名前には、シーニヤが顔を背けたのを見逃さず、リオ・スシールが苦笑する。
つづいてヒーリヤの特権だと感じる。

「——ヤちゃんたら。拗ねているの？」

「拗ねてません。ショックなだけです」

上級生に、つい口を開けるのは、そして許されてしまうのは、

「そうねえ。ショック、と言えばショックだけれど。でも、こ

れで何もかもが終わったわけではないでしょ？」

「う

「終わりですよ。完全に、終わりですよ。だって、あたし程度の魔力で、この先、シーニャ先輩と仕事とかで顔を合わすこともないだろ？」「よしんば会えたとしても、何年先のことになるやう。そんな先に、シーニャ先輩があたし」と話を覚えているかどうかなんて、怪しそうぎる」

「あら。随分と、自分のことを過小評価するのね。どうして？」

「どうして……？」

「たかだか、魔力の善し悪しで？馬鹿げてるわ」

さつぱりと言いつたその言葉に、シーニャは不満そうに眉を顰め、コリアは眩しそうに目を細める。

「あのね。シーニャは、自分のことを多く語りたくないだろ？から、代わりにあたしが言つんだけ。シーニャは、どびきり才能のある魔導士であり賢者よ。それは、認めます。でも、生まれた時から、何の苦労もなしにあんなたわけじゃないの。彼女、今は呪文詠唱なしに魔法の発動が出来るだろ？けど、そこには至るまでにものすごい量の鍛錬を積んでいるんだから。賢者であるが故に、攻撃魔法に触れる機会が少ないからって、わざわざ魔導士のクラスにもアテンダントしているし。知識だけなら、一介の魔導士以上のレベルだと思う。そういうね、それ相応の努力をしているひとを相手に、あたしごときとかあたし程度とか、そういう風に自分を蔑んで、自分を哀れむのは、ショックを受けたつて言わないの。そつこりの、ただの子供っぽい拗ねた態度だと思つ」

むつとした表情を隠そともせずに、シーニャが口を開きかけたとき、扉が開いた。今度は、ノックもなしに。

「おいおい、リオ。ひとのいいひんところで、勝手なことは言

わんで欲しいなあ

いつもの、世間を斜に見たような笑みを浮かべて、シーニヤ・エモ里斯が靴音を立てて、近付いてくる。突然の来客に、言葉を失つた二一一ヤにシーカルでいて優しい眼差しを向け、シーニヤ・エモ里斯は、

「二一一ヤ。さつきは、あなたの話も聞かんで、こっちの都合ばかり話してしもたな。なんや？ さつき、ニコースがある言うて、うちに話しかけてきたやろ？ 気になつてなあ。良かつたら、話してくれへんか？」

今度こそ拗ねて、そして多分は嬉しくて恥ずかしくて、二一一ヤは俯いたまま何も答えないでいる。シーニヤ・エモ里斯とリオ・スシールは、お互いを見やつてから、

「お前のせいやぞ、リオ」

「何言つてるの。元はといえば、あなたのせいでしょ、シーニヤ」と、囁き合っている。

「二一一ヤのニコースつてのは」

多少、お節介な気もしたが、二一一ヤがあれだけ嬉しそうにしていた事實を知る者としては、黙つたままではいられない。おずおずとコリアが口を開き、先輩二人の視線をこそばゆく感じながらも、二一一ヤに止められる前にとやや早口で言つた。

「二一一ヤ、呪文詠唱なしに魔法発動が出来るよつになつたんで

す

「へえ…」

「す」「こじやない！」

「あほ。

お前は、呪文詠唱なしの難しさなんて、知らんやろが

「失礼ね。

呪文を覚えてから呪文詠唱を省く方が、魔法の威力

が増すから、あたしだって火の魔法呪文、全部暗記したんだから。

大変さは分かってるつもりですー」

「何や、退化してんのんかいな」

「うつるつさいなー、シーニヤは。

とりあえず、今はあたしの

ことじやないんだからー」

「それもそうやつた。退化し続けるお節介魔導士のことは、放

つておこかな

「一言多いのよ、いちいぢー！」

痴話喧嘩にしか見えない言い争いを繰り広げる、天才魔導士ふたりを目の前にして、二一一ヤが堪えきれずに吹き出した。

「なんやねん、二一一ヤ」

「え？　え？　何かおかしかった？」

「お前の顔はいつも、道化師ぱりの面白さやで」

「もうー。シーニヤはちよつと黙つててよ、この性悪癒し系ー！」

「なんやとー。」

「図星つかれて怒るなんて、なんて程度の低い『聖ヤンセン』なのかしら

（？）

「お前な、言つて面白いことと面白ないことがあんねんぞ

「だつたら何よ、自分は、いつでも面白いことが言えるとでも思つているの？　とんだ天然お笑い芸人ね。学校辞めて家業継ぐ代わりに、そのまま芸人にでもなつたら？」

「外面良いだけの金喰い公女ー！」

「言つたわねー！」

ますますヒートアップする五十歩百歩な言い争いに、コリアは信じられないと首を振り、二一一ヤは笑い転げる。

「せやから、何がそんなにおもいねん、二一一ニヤ」

「だつて……！ だつて、シーニャ先輩でも、狼狽えたり、苛々したりする」とあるんだなあと思つたら。 しかも、口喧嘩の相手が、公女様だなんて……。 面白くつて！」

「あんなあ、二一一ニヤ。 何を勘違いしてるとか知らんけどやな。 うちかて、普通の人間やねんで。 あんたが、ちゃんと練習して呪文詠唱なしに魔法を使えるようになつたように、うちかて笑うし怒るし、トイレも行くしやな」

「シーニャ…」

顔を真っ赤にしたリオ・スシールが窘める。

「つまりや。 うちとあんたとの差なんてな、そんなにないねん。 同じように、うちという人間の上に、どんな称号が乗つかつていよつと、うちという人格にはあんまり関係がないねん。 せやから、うちが学校辞めるから言つて、いきなりうちがあんたの人生から消えるわけちゃうねんで」

「シーニャ先輩」

「ああ、じうじうのんは、ガラに合わんわ」

心なしか上氣した頬を、乱雑に髪の毛を搔きむしることで誤魔化して、シーニャ・エモリスは歯を見せた。

「とりあえず、また後で、や。 な？」

「……はいっ」

「またいつか、会えるさかい。 な？」

「……ひつ、……は、はいっ！」

「コリアちゃんも。 また、ね？」

先程まで「」い剣幕で声を上げていたとは思えない、淑女の見本のような仕草で、リオ・スシールが手をコリアに差し出す。

「あなたも、出来るよつになつたんでしょう？」

「なにがですか？」

「呪文詠唱抜きの魔法発動」

「……」

「別に、嘘をつく必要も、謙遜する必要もないわ。だつてあたし、あなたが練習してゐるところを、偶然見てしまつたんだもの」

「……」

言いたいことが、言葉にならない。頭の中を、言葉の欠片が漂つてゐる。それを掴んで、口から出すことが出来なくて、コリアは困つたよつに眉根を下げた。

「大丈夫。全部、言葉にしなくとも、良いの」

その言葉に、どれだけ感謝したかつたか。それすらも、言葉に出来ない自分を、どれだけもどかしく思つたか。

Scene 4：特別な日

自分は、自分でしかなくて、それ以上にもそれ以下にもなれないのだとthoughtていた。それは、自分を受け入れるだとか認めるだとか、そういうポジティブな響きを持つものとは少し毛色が違ったようだと思つ。

今にして思えば、あれは諦念に似ていたのではないだろうか。

でも、それも終わりだ。

気付いてしまったことには、もう田を背けられない。認めてしまった自分の心は、これ以上無視出来ない。知ってしまった眞実からは、もう後に退けない。そして何より、味わってしまった夢の欠片は、なかつたことになんて出来ない。決して。

「へへ。どうだつた？」

いつも、綺麗なツインテールに結わえられている栗色の髪を散々に乱して、教員室の一部である面接室から出てきた一一ニヤは、鈴を転がす可憐な声と子供ギヤングの大将の顔で言つた。

「概ね、想定していた通りだ」

魔法学校のトレーデマークでもある制服の襟元を正して、ユリアは薄く笑う。

「そつちこせ、どうだつたんだ？」

「めつちやくちや怒られたよ。氣の長いあたしも、結構失礼なこ

と言われちゃつてさ。ついつい机に乗り上がって、カプア先生の胸倉掴んじゃつたよ。えへへ

「お前が気が長いだなんて初耳だが、突っ込むところは最早そこじゃないだろうな」

その笑顔だけ見れば、中高年の癒しアイドルにもなれそうなのに。どうしてこんなに喧嘩早くて、その上短気で向こう見ずなんだろう。ルームメイトの第一印象を裏切る中身に、ユリアは今更ながら思いを馳せる。

「でもまあ、それも

「そり

苦々しくも清々しい気持ちで微笑むと、一一ニヤも同意するように笑みを大きくする。

「想定内

同じ言葉を真顔で、廊下で見つめ合つて呴いたかと思えば、くすぐすと肩を震わせて笑うふたりの姿は、他の生徒たちからは余程奇異に見えたことだろう。

「一旦、部屋に戻る」

「うん。お祝いしなくちゃだよね」

違つ理由で提案したユリアは、一一ニヤの言葉に首を傾げた。

「祝う? 何を?」

「もちろん」

と人差し指を顔の前に持つてくると、一一ニヤは自信満々に言い切

つた。

「あたしたちの、新しい門出に決まつてゐるじゃない
」なるほど

吹き出してしまつてから、コリアは不謹慎だつたかなと教員室に目を配つた。ニーニャの底抜けに樂觀的な人生の過ごし方は、コリアのともすれば生真面目過ぎる性格を上手く中和してくれる。

ヴェランデ国は、南北で国民性が随分と異なる。北方が商人として名を馳せてゐるのに對し、南方は商品となるものを作ることを生業とする者が多い。北方の冬が厳しいのに對し南方は冬でも暖かく、氣質がおおらかな人間が多い。

その条件から言えば、南方出身であるコリアは、おおらかで樂觀的、社交的でお祭り騒ぎが大好きな人間ということになる。が、それらの性格はおおよそコリアには見出しがたいもので、逆に、北方出身であるニーニャは南方のステレオタイプのようである。

「ね。ね。前に街へ行つたときに買つてあつた、フルーツケーキ。
あれ、食べちゃおうよ」

「え？ でも、あれば、特別な日のためにとつておくんじやなかつたのか？」

「もー。コリアつたら。謙遜もね、やり過ぎると嫌味なんだよう？ 今日が特別な日じゃなかつたら、いつが特別な日なの？ 特別な日なんてね、待つても来ないんだから。こつちから作つちゃわないといと！」

屈託なく笑うニーニャに、内心胸を撫で下ろす。数日前まではみんなにふさぎ込んでいたとは、今の彼女を見ると俄には信じ難いが、この切り替えの速さも、友人の長所だと思つコリアである。

「なに」

「ん？ 何がだ」

「いやにやしてゐる。コリア。何？ 珍しいね。妄想？ それとも、

超妄想？」

「なんなんだ、その超妄想つていうのは。それに、違ひ。妄想なんかじゃない。お前と一緒にするな」

「あ、言つたね！」

「お前が、元気になつてくれたみたいで良かつたなと思っていただけだ」

「え」

可憐というよりもコケティッシュな唇をすぼめて、ニーニヤがぱちくりと瞬きを繰り返す。途端に耳まで顔を赤くすると、言葉を絞りだそつと口をぱくぱくさせた。ビリヤー、照れていらうじい。

「な。な。何よ、何よ。コリアだつてね。吹つ切れましたつてな顔してゐんだから。清々しい、爽やかなスタートだぜ、人生やり直すぜつて顔してゐんだから！」

やけくそ氣味に発せられた二二ニヤの言葉に、今度はコリアが頬を赤らめる番だった。

確かに、あの日から、自分で何かのふんぎりがついたのは自覚していたが、それが周囲に分かるほどのものだつたとは。感情を押し殺して生きていきたいなどと願つているわけでもないが、しかし、あまりにも分かり易いというのも困りものなのではないだろうかと思つてしまう。簡単な話、恥ずかしいのだ。自分が感じていることを他人に悟られるのがとても恥ずかしい。なのに、なのか、だから、なのかは定かではないが、感情を惜しみなく表現出来る人間が羨ましい。

お互いに紅を差したような顔をして、気まずそうに見つめ合ったのが、どちらともなく笑いが漏れた。

「コリアって、意地つ張りだよね」

「お前もな

皿を細めて、挑戦的な微笑みで言つた。「いや」と、伏せ皿がちに心えるコリア。

教員室のある廊下を後にし、自室に向かつ。窓から見える魔法鍛錬場は、ちょいびコリアたちの学年が実技の訓練中だった。

「なんかさ。ちょっとまだ、信じられないんだよね

「そうだな」

ゆづくとは言わないまでも、通常よりかはゆつたりとしたペースで歩きながら、同級生たちを眺めた。

鍛錬場ではふたつのグループが指導官の下、懸命に魔法の詠唱を学んでいる。ひとつは魔導士。もうひとつは、賢者だ。

「ずっと、そうだったら良いなって思つてたの。あたし。でも、今までそれが実現出来るなんて思つてもみなかつた。だってそういうやない? 魔力検定の石は嘘をつかないもの

「歯向かつてみても、な

「でもさ

窓辺に近寄つて、ニーニャが立ち止まる。どこか懐かしそう

それでいて未来を見つめる瞳でコリアにだけ聞いえた声で言った。

「やつてみなくちゃ、分からぬよね」

「……ああ」

答えたユリアにも、勝ち気に歯を見せた二二ニヤにも、脳裏に浮かんでいたのは同じ人物の筈。

「偉大だな」

ぱつりと呟くと、二二ニヤがツインテールを弾ませて頷いた。

「シーニヤ先輩も、スシール先輩もね」

またしても、ふたりで見つめ合つてふふふと笑い合つところだつた。教員室からしかめっ面をした教官が廊下に出てくる。

「カプア先生」

人なつこい声で呼びかけた二二ニヤに、先程よりも色濃く刻んだ眉根の皺はそのままに、カプアは手にした紙切れをかざして大仰にため息をついた。

「まだここにいたのか
「うめんなぞーー」

まったく罪悪感を感じさせない、新風のよつな口ぶりの二二ニヤに、カプアは一度目を見開いてみせる。信じられない、とでも言いたそうに。それから、ユリアの方に目を向けた。

「君も、らしいな」

「はい」

「まつたく。何を考えているのか、私にはさっぱりだよ
「でもあたし、カプア先生に理解されたくない、ここに来たんじゃ
ありません」

「二二ニヤ！」

あまりに過激な発言に、ユリアが二二ニヤの袖を引っ張る。しかし、カプアはこれには頬を緩める。

「分かっている。だが覚えておけ。年長者の苦言とこいつのは、後からでしか理解出来ないものだとこいつとも、な」

一ヒルに片方だけの眉を上げると、手にした紙切れを窓とは反対側にある壁に貼り付ける。神経質な彼らしく、きつちりと四隅を手で押さえて、浮いたところがないのを確認すると、ふたりには見向きもせずにとりつく島もなく去つていつてしまつ。

「相変わらず、堅物だなーカプア先生は
「お前が挑発するからだ」

ばか、と二二ニヤの向こう意氣の強い性格を批判してみるが、本人はあつけらかんとしたものだ。また問題になつたらどうじょうと危惧するユリアを背に、先程貼られた紙へと歩み寄ると、二二ニヤは破顔した。

「ユリア！ 見て見て！」
「……なんだ」

億劫そうに言いながらも、ユリアも紙が貼られた壁の方へと近寄る。紙に書かれた内容を一読すれば、彼女も、抑えきれない笑みを顔中に広げた。

「お祝い、しなくちゃだな
「もつちろん!」

紙に書かれた内容は、こうだ。

『専攻学科変更のお知らせ
二二ニヤ・ガルダス
魔導士学科から賢者学科
コリア・モースタン
賢者学科から魔導士学科
以上、二名の学生の専攻学科変更をこうに認める』

や。や。や。いやと、更新、でき、た……（ぱたり）。

忘れられた頃に更新される小説として悪名高くなつてしませんでしょうか。な、なつてますよね、きっと（汗）

すすすすす、すみません……!!

Act II-IIはあともうひとつで、終了です。

そうしたら、もっと書きやすいあのひとがついに登場です！ 読んでいただければばれちゃうと思いつのですが、私、シーニヤがかなり好きなのです。好きすぎて、どんどん彼女の出番が増えてしましました（滝汗）

ある日、二二ニヤに突然腕を掴まれ、校内を走らせられた。起伏が激しいというか、行動が突然というか、予測出来ないことを予測出来ない速度で行動に起こすというか。兎に角はちゃめちゃな行動が多い二二ニヤではあるが、これにはさすがのユリアも目を丸くした。

手首を掴んだまま、前を一心不乱に走る二二ニヤについていくので精一杯で、疑問を挟む余地などない。とうに一人とも息は上がりついて、会話をするどころか、足がもつれないようにするのに集中しきつっていた。

「ど、どう、した」

息も切れ切れながら、少ない言葉で何とか尋ねてみる。

「いい、か、らつ」

案の定というか、二二ニヤらしいというか。何の答えにもなっていらない答えが返ってくる。ちらりとこちらを振り返った二二ニヤは、チャーミングに片目を瞑つてみせる。

広大な敷地を擁する魔法学校は、四方を高い壁に挟まれている。この学校から、次代を担う大魔導士や賢者が生まれるのであるとすれば、ここで育てられる才能の卵ひとつひとつが重要機密になりかねない。というのが学校側の見解だが、生徒として身を置くユリアにしてみれば、取り越し苦労に過ぎないとと思う。もつとも、二二ニヤに言わせると、自分を高く売ったもん勝ちなのだから、あながち学校も馬鹿ではない、ということらしいが。

その四方の壁から校舎までは更にまだ距離があるので、よしんば壁の上によじ登れたとしても、授業風景などは見えないのが現状だ。だからこそ、ユリアは学校の神経質さに嘆息したくなる。

そして今、ニーニャに手を引かれて走り続けるコリアは、その壁のひとつに向かつていた。

灰色の無愛想な壁が田の前に近付いてくるにつれ、走る速度を段々と緩めはしたものの、ここまで全力疾走してきたせいで、上がった息はまつたく整わない。息を吸うと同時にひゅうひゅうと肺が悲鳴を上げる音ますます。幸い、最近気温がぐっと下がったおかげであまり汗をかかずにするんだ。

「こ……」

膝頭に手の平をおいて、背を丸めて息をしてくるニーニャのツイントールに声をかけようとした。

「おーおー。そない走らんでもええのに」

ひとを小馬鹿にしているような、それでいてこちらを労るような独特の口調。入学と同時にヴェランデ標準語に変える生徒が多い中、北ヴェランダアクセントを使い続ける、その甘い声。

肩を上下させたまま、声がした方向に視線を向けた。

やはり、とこうべきか。

見知った顔はそのままに、いつもよりも少しだけ困ったような、苦笑に酷似した笑みを浮かべて、そのひとは壁の上に腰掛けっていた。タイトなミニスカートは黒。そこからすらりと伸びる脚は黒いタイツに覆われていて、足元は、ついた黒のレースアップブーツ。もちろん、ヒールなんてついていない。シンプルな服装なのに、足を組んでこちらを見下ろすたつたそれだけの仕草がとても色っぽい。そう、同性ですら見惚れるくらいに。

「し……」

「ああ、ええて。まだ息が上がつて喋らねへんのやう? 無理せんでええ」

首を軽く左右に振つて、コリアの言葉を止めると、軽い身のこなしで壁から降りてみせる。結構な高さがあるはずなのに、大した音も立てずに着地する様は、猫のよう。

黒のノースリーブタートルの上には、真白いマント。防寒用にしては少し生地が薄い気がするが、彼女は寒さなど気にしていないようで、せいぜいと息をするコリアとニーニャとを見つめていた。

闇夜にあつても光り輝くであろうダークグリーンの双眸を細める
と、す、と片手をふたりにかざす。

「あ……」

ニーニヤが小さく感嘆の声を洩らした。それもそのはず。あれだけ体中に広がつていた倦怠感が、ふわりとどこかへ浮いていくように消えていく。そして代わりに注入されるのは、夏のお日様にあてられたような暖かい充足感。

「どう? ちょっとはましになつたか?」

リクベラシオメンテメボーラ
回復と精神向上を同時に、しかも複数の人間に。その上呪文詠唱なしで。顎が外れるくらい桁違いな魔導の才を見せつけられて、ようやくコリアは今のこの状況を現実と認識出来る。自分が今対面している相手が、そいつた非現実を扱う人物なのだと。非現実なほどの魔導で、現実感を感じるだなんて、おかしな話ではあるが。

「ありがとうございます、エモリス先輩」

律儀に礼をするコリアに、シーニヤ・エモリスはふんと鼻で笑つて応える。

「いいや？　ここまで走つてもるたんは、つりやさかいなあ。これくらい、礼を言われるうちにも入らんわ」

さばさばと言い切つてから、首だけを校舎の方に向ける。小さく、

「ふん……。頭の堅い教師に勘付かれると、ややこじこじにならな。ちよつと、消そか」

「消す？　何を？」

「ちよつとの間、見えへんようにすんねん」

「言つや否や、三人を由く淡い光が包み込む。半球体をしたそれは、じぢぢからは磨りガラスのように外が見える。

好奇心に駆られて、一一ニヤがそれに触れようとしつつ、半身だけをシーニヤ・エモリスに向ける。

「これ、なんですか？」

「んー？　何やろな。オリジナルやから、名前はないんと違う？　教科書にも載つてへんし、一応歴史書にも由を通したけど、それにも載つてへんかったわ。似たようなんなら、色々載つてたけどな」「オリジナル、ですか」

決して浅くはない魔導の歴史の中で、複合魔導や混合魔導と呼ばれる類は、えてして難易度が高い。効果と呼ばれるほどの効果すら起こせず、机上の論として扱われるだけのものも多数ある。その中で、オリジナルを作り出せるというのは、並大抵のことではない。由を瞪つて、というよりも目をひんむいて凝視するふたりに、シニヤ・エモリスは片眉を上げて困つてみせる。

「なんやなんや。そないな顔せんでもええやんか？　たかがオリジナルのひとつやふたつや。それも、そこまで実戦力はない類や。別に自慢するようなことやないで」

「聞いても分からぬかもしれないとすが、ひとつ、お尋ねしても良いですか？」

「コリア。あんたのそれは、美德かも知れへんけど、あんまり褒められた癖とちやうなあ。必要以上に自分のことを謙るのは、逆に相手に失礼になつたりすんねんで。あんたは、自信過剰になる心配がない代わりに、もうちょっと、自分のことを客観的に評価する癖をつけた方がええわ。……と、説教臭くなつてしまたな。あかんなー。年やな。ほんで、何や？ 聞きたいことて」

「今の、この光の膜、何の複合魔導なんでしょうか？」

「外側が迷彩カムフラージュで、内側が沈黙シレンチオ、仕上げに半径一キロほどに回避をかけただけや。周りからはずらることは見えへんし聞こえへん。そんでもって、こっち近くに来たとしても、魔導が発動しているとは気付かへん、ちゅうわけや。今日みたいな日にうつてつけやと思わへんか？」

そう言つて、片頬だけを動かして微笑む彼女は、暫くぶりに見たからこそ、直視するのも憚られるほどに美しかつた。

「呼び出して悪かつたな、一一ニヤ」

少しだけ、声のトーンが変わる。それを感じ取つたコリアは姿勢を正し、一一ニヤは再会の感動で潤んだ瞳はそのままに、何度も首を左右に振つた。

「いいえ！ そんな、悪いだなんて。嬉しかつたです。本当に」

コリアの心中を読んだのか、それともその質問をあらかじめ予測していたのか。どちらにせよ、内心、どのよつに尋ねれば良いのか考えあぐねていたコリアにとつては好都合だった。

「一一ニヤにな、うちが連絡を取つたんや。うちは確かに、この学校の自慢の種のひとつかもしれへん。せやけどな、同時に厄介な

問題児でもあつたさかいな。煙たがられてるねん。そんなうちが、生徒のひとりに会いたい、言つたらどうなるか、まあ予想はつくわな。それでなくても、ここを出るときこ、金輪際、在学生との接触は取らんてくれ、言われてるからな

「どうしてですか？」

「悪影響やからとけやつか？」

「そんな！ シーニヤ先輩が悪影響なら、他のどの先輩だつて悪影響ですよ！」

「ははは。可愛い」と言つてくれれるやんか、シーニヤ

言いながらも、シーニヤの言葉に心動かされた様子はなく、シニヤ・エモリスはその猫科を連想させる瞳を細めて、ゴリアに視線を動かした。

「……なんですか？」

「じれ。預かりもんや」

一皿で上等なものだと分かる、一通の封筒。少し小振りなそれは、シニヤ・エモリスの手にすっぽりと収まっている。封筒の角のひとつを指でつまんで、ゴリアに差し出した。

「私に、ですか？」

指先に触れた封筒は、見た目から想像された通り、とても滑らかな手触りをしていて、いよいよ上質なのだと理解する。封筒の表には、黒のインクでコリアの名前。裏側にはゴールドの封蝋。そこに押された印璽の紋章に、目を瞠つた。

「これ

それ以上、きちんとした言葉を口に出せずに、驚いた顔のまま、シニヤ・エモリスを見上げる。彼女は、普段見せるひとをからか

つかのよつな笑みではなく、優しく思慮深い微笑みをたたえていた。

「手紙、書いたんやつて？」

「え？　え？　なに？　なに？　どいつこいつ」と？」

ひとり、事情の飲み込めない二一一ヤガツインホールを揺らしながら、コリアの肩越しに封筒を見よつとする。

「え！　それ、その印鑑つて、まさか！」

そこに押されていたのは、紛れもなく、ロクサンヌ公国の王家のもの。

「ちよ、まさか、それつて、リオ先輩からの手紙なの？　え、なんで？　なんでなんで？　コリアつてば、なんでまた。リオ先輩から直々にお手紙もらつちゃうの？　すういんだけ？　でも、なんで？」

矢継ぎ早に繰り出される感想と質問に、コリアは首を傾げるしかない。

その答えは、田の前に立つ『聖』からもたらされた。

「リオに手紙、書いたんやろ？　喜んでたで。知り合つて長くもないあんたに、手紙をもらえるなんて光榮や、つてな」

「コリア、リオ先輩にお手紙書いたの？」

「……ああ」

「そつか」

「なんで、とは聞かないのか？」

田尻が下がるほどに笑みを深めた友人に、コリアは眉を顰めてしまつ。あれだけ好奇心全開で質問しておいて、ここで引かれると、

逆に不自然だ。

「だつて。書きたかつたから、書いたんでしょう？ 良いじゃない、それで。返事もられて、良かつたね」

「……ああ」

「リオな。実は、別にこの学校に来る予定と違てん。うちが、無理矢理引っ張ってきたようなもんやから。学校は、うちが退学した理由は、リオやと思ってる。そんなんとちやうのにな。だから、ユリアに返事を書いて送つても、きっと学校が受け取り拒否するやうつて思たみたいやな。それで、うちにあつかいを頼んできたわけや」「ありがとうございます」

ユリアは、深々と頭を垂れた。他に、どうすれば良いのか分からぬ。返事が欲しくて手紙を書いたんじゃない。そう言つてみようかとも思つたが、それを言つてどうなるのかは分からなかつた。ただ、返事を書いてくれたリオ・スシールへの感謝と、これをここまで届けてくれたシーニヤ・エモリスへの感謝を、他にどうやって伝えれば良いのか分からなくて、ユリアは長い間頭を下げ続けていた。

「つてこいつのも、実は口実でな

視線を下に向けていたから、それを言つたシーニヤ・エモリスがどんな顔をしていたのか分からぬ。

「つちもな、会いに来たかつてん。シーニヤ。これは、あんたに
や

はつと息を詰める音がした。あのお喋りなシーニヤが、あの口から生まれてきたのになればどこのから生まれてきたのか分からない評されるシーニヤが、言葉もなくして傍らに立つていて。

「泣きなや」

片眉を上げながらも苦笑するシーニヤ・エモリスは、手の平に置いたそれを一一ニヤが受け取らないので、仕方なくそれをもう一度握りしめる。もう片方の手で、一一ニヤの後ろ頭を撫でてから、ぐいと自分に引き寄せた。たらを踏むように、一一ニヤが憧れ続けた先輩の方に近付く。必然的に、意外と背丈のある彼女の胸に頭を置く形になつた一一ニヤは、その白い肌をさつと赤らめて硬直してしまう。そのショックからか、すっかり涙が乾いた一一ニヤがそつと視線を上げると、シーニヤ・エモリスのそれと真つ向からぶつかった。

「泣かんでもええ。な？」

「ぐぐぐと必死に頷く一一ニヤに、シーニヤ・エモリスは朗らかな笑顔になる。一一ニヤの涙に濡れた頬に残つた雪を指ですくつてから、閉じていた手の平を広げてみせた。

「これ……」

そこに置かれたものを凝視する。何度も見ても変わらないそれに、それでも信じられないと一一ニヤの顔が叫んでいる。

「コリア……」

リオ・スシールからの手紙を手にしたまま、傍観者に徹していたユリアの方を向いて、一一ニヤが困った顔で呼ぶ。

「どうした

気の利かない言葉だとは思いつつ、それしか口をつかなくて、自分の不甲斐なさに後ろ頭を搔きつつ、一一ニヤの元へと歩み寄つた。

「これ

大きな瞳をこれでもかと見開いて、一一ニヤが指し示すそれを見

て、コリアもまた絶句せざるをえなかつた。

シーニヤ・エモリスの手の平の上に置かれたのは、紛う事なき魔力検定の石。小振りなピアスサイズのその石は、コリアにもニーニヤにも見慣れたものであつたし、この学校に通う生徒なら誰でも手にしているものだ。魔力検定の石は、手にした人間の素質を汲み取つて、様々な宝石へとその質を変じる。いわば、魔導に携わることを考える人間が真っ先に手にする魔導具が、魔力検定の石だといえなくもない。

ニーニヤが持つているものはルビー。フォーコ火の魔導士であることを意味する。コリアが持つているのは、パール。これはコリアが賢者の資質を持つていていることを示す。今、ふたりの目の前にあるそれは、オパールだつた。それも、とても色の薄い、ウォーターオパールと呼ばれるもの。オパール自体も珍しい。魔導士というのは、何かひとつ特性魔導に強化した者が多い中、オパールを手にする魔導士というのは、全ての特性魔導を操れる。その中でも極めて特殊なのがウォーターオパール。これは、賢者の資質を持つた魔導士が手に入れられるものだと、図書室の資料や魔導歴史などで繰り返し教えられてきた。そしてその資質を持った者は、『聖』の称号を与えられるのだと。

それが、目の前にある。

眼前の宝石と、頭の中に入っている知識とが、上手く噛み合わない。そのふたつから導き出される結論はひとつしかないはずなのに、ニーニヤとコリアのふたりともが、回らない思考回路に翻弄されるまま。

「コリア。リオからもつた封筒、開けてみ?」

思わせ振りに、シーニヤ・エモリスが言つ。囁くよつたその声に誘われるまま、コリアがおぼつかない手で封筒の封を切つた。

中に入つてゐるのは、封筒と同じくじつと上質な紙。それを広げてみれば、リオ・スシールの姿を彷彿とさせる、流暢でいてどこかあどけない筆記体。

『コリアちゃんへ

お手紙、ありがとう。とても、嬉しかつた。

これをこのまま送れば、きっと貴方には届かないと思つから、少々柄が悪くて口の悪い郵便屋さんにお託します。

この気持ちが、コリアちゃんに届きますよつ』。

リオ・スシール

PS・気持ちばかりのものだけれど、コリアちゃんとあたしの思い出として、受け取つてくれると良いな

簡潔ではあるけれど誠実な文面に、恥を忍んで文をしたためたコリアの気持ちが楽になる。

ただ、最後の文章が引っかかった。そして、その引っかかりを後押しそうに、封筒の中の何かが指に触れる。

「どうしたの、コリア」

「中に、何か入つてゐるみたいだ

「え?」

手紙を指で挟んだまま、封筒の口を開けて、もう片方の手の平の上へと逆さまにすると、いろいろと小さなものが転げ落ちた。

「これは……

手の平で赤く輝くそれは、またもや魔力検定の石。こちらはルビーのようだった。——ニヤが手にしているのと同じサイズのそれは、光を受けて七色に変化するオパールと違つて、煌々と意志の力を感じさせる光を放つている。『火』を示すものであると、一目で分かる。『火』の魔導士というのは、別段珍しいこともないため、それ自体には驚かない。ユリアが言葉をなくした理由は、ただひとつ。その石が、ピジョン・ブラッドと呼ばれるルビーだったからだ。

「ラス・ジャマス・デ・インフィエルノ」

上質のアルコールを彷彿とさせるまろやかな声で、シーニヤ・エモリスが言った。

「聞いたことあらへんか？」
「も、もちろん」

聞いたことはある。魔導に少しでも知識があれば、知らない人間なんて、いないはずだ。

紅蓮ヘルファイアの名で知られるそれは、元々はオード帝国で見つかった。魔導士を輩出する歴史を持たず、あくまでもその屈強な物理的戦闘能力に秀でた騎士国家オードにおいてそれが発掘されたことによつて、オードは一気に魔導界にも知られるよつになつた。

「『火』の特性魔導の中でも、より強く、より純粋な才を持つ者が手にすると言われている石ですよね」

教科書で読んだままを呑けば、——ニヤも首を縦に振つて同意する。

「プレゼントや、うちとリオから。——ニヤが持つてんのが、うちの魔力検定の石。あんたの手にあるのが、リオのや」

「スシール先輩つて、紅蓮持ち《インフィエルノ・デュエー》『

』なんですか」

「公にはしてへんねんけどな。色々と、面倒なことになるさかい」

「面倒なことって?」

「せやなあ。ロクサンヌは魔導の強い国やけど、国としては弱小やさかい、色々と政治に使われるかもしれんやろ、リオのその力がそういうのんを、リオのおとんは嫌がるねん。ただの過保護かもしれんけど、まあ、国が関わつてくるとなるとなあ。避けといた方が無難かもしれんわな」

「なるほど……。そ、それで、どうして、これ私たちに?」

「やから、プレゼントやで」

「でも、シーニヤ先輩の石はどうなつちゃうんですか?」

大きな瞳を更に大きくして、二ニヤが尋ねた。

「どうもならへんよ」

動じず、落ち着いた視線を二ニヤに向けてシーニヤ・エモリスが言う。

「いらんから、それ」

「でも!」

「いらんねん。うちも、リオも。あつても、しゃあないねん。むしろ、あつた方が足枷になるねん。ほんまはな」

苦笑と共に、少しだけ視線を上方に泳がすと、また二ニヤにそれを見据える。

「捨てよかな、つて言つてたんや、リオと。そしたらリオが、これの価値が本当に分かるひとに渡したらどうかって言い出してな

「本当の価値?」

「ヘルファイア、サンジョ・ビアンコ紅蓮が凄いだの、白賢者が凄いだの、そんなどうでもええこと

を言わんやつに渡す、ちゅうことや。そういう付加価値は、部外者が決めることがから。自分が誰か言つんは、結局のところ、自分で

決めなあかんから

ふと、瞳が遠くへと移動する。シーニヤ・エモリスに今見えてい
るそれは、自分たちには知り得ないものなのだろうかとコリアは想
像した。隣に佇む二二ニヤはまきつと、それに嫉妬と羨望を感じてい
るだろ？

「自分のやりたいことをやるために、専攻学科の変更をしたんや
る？ それの、お祝いやと思つてくれたらええわ」

「二存知だつたんですか」

「はは、実家が商家やからな。耳が良いねん

「でも、シーニヤ先輩。こんな凄いもの、受け取れませんよ」

「なんで？」

「だつて、これ、シーニヤ先輩の」

「うちの？ なんや？」

「それは……」

「うちのなんやううな？ 魔力の源？ ちやうぢやう。ビジネスを
する上での名刺？ それもちやうなあ。ほな、これは、なんや？」

「これは……、だから……、シーニヤ先輩の、あたしの、あたし
が、シーニヤ先輩を憧れるきつかけになつた……」

賢明に言葉を探そうとする二二ニヤにて、シーニヤ・エモリスはし
たり顔で微笑む。

「それは、あんた事やうう、二二ニヤ」

「あ！ そ、それは、えつと、だから」

「ええねん。苛めるつもりで言つたんやない。それで、ええねん。
そういうあんたやから、これもろて欲しいねん」

「で、でも」

「よーつ考えてみ？ 二二、あんたが受け取らへんかつたら、う
ちは捨てるつもりなんやで？ どのみちこらん石つこひや。これを
もうつた二二ニヤが、後どうじよつと勝手や。転売するなりなんな

り、好きにしたらええやん。どや。もろてくれへんか？」

「そ、それは……」

断れるはずもなく、一一ニヤはへの字にした眉毛をコリアに向ける。コリアは、静かに石の置かれた手の平を閉じて、シーニヤ・エモリスに向き直った。

それだけで、頭の良い彼女には充分だつたらしい。満足そうに小さく頷いてから、白いマントを揺らして一步下がる。

「シーニヤ先輩！」

不安な気持ちをそのままぶつけてしまえと言わんばかりに、一一ニヤが悲愴な声を上げる。

「そろそろ、行くわ

「あ、あの！」

すでに背中を向けてしまっているシーニヤ・エモリスに、一一ニヤは尚も声をかけた。

「一一ニヤ」

何か、特別に言いたいことがあつたわけじゃない。ただ、何かを言わなくてはいけないと思つただけなのだ。そんな一一ニヤの気持ちが分かったコリアは、助け船を出せない口べたなおのれを恨む。そして、一一ニヤの収集のついていない言葉が発せられるよりも先に、シーニヤ・エモリスが彼女の名を呼んだ。

「は、はい」

その声が、いつもよりも威厳に満ちたものだつたからだろうか。自然と、一一ニヤは背筋を伸ばして、返事をしてしまう。

白いマントに、真っ黒な衣装。月下で息をひそめる獸を思わせる身のこなし。氣高い狼の瞳に、闇に瞬く星空の輝きを持つた髪。そして、本当は、誰よりもおひとよしで照れ屋な、その深い愛情と広い心。

魔導の才だけではない。容姿、人柄、すべてにおいてニーニャの憧れを具現化した先輩は、首だけでニーニャを振り返ると言つた。その田元が、少しだけ濡れているようにみえたのは、思い過いしだつただらうつか。

「つちのこ」と、忘れんといでな

「あ、あ……。当たり前ですー」

震える唇を叱咤して、声を張り上げたニーニャは、ぽろぽろと涙をこぼす。それを受けて、シーニヤ・エモリスは、

「おおきに」

言ひやいなや、その姿がかき消えてしまつ。

彼女のかけた魔導は痕跡さえも残さず言葉通り消滅してしまい、その場に残されたふたりは、呆然と空を見上げた。

晴れだとも曇りだともいえない、曖昧な空模様。雲の小さこのやら大きいのやらが、脳天気に漂っているばかり。風も、まったくないわけではなく、だからといって、びゅうびゅうと吹いているわけでもない。少し気温が落ちただけで、寒くもなく、また、あたたかくもない。

どこをどう取つても、平凡極まりない天気。

学校を囲む四方の壁は、依然として無愛想に立ち、校庭からは、魔導訓練に励む生徒たちの声が遠く聞こえる。面白味など感じられない校舎に、新鮮さのない風景が馴染む。

それでも。

「の田を一生忘れないとこくであらう」とは、容易に想像できた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9908e/>

眠り姫の起床時刻

2011年2月25日00時39分発行